

平成25年1月1日

防衛大学校同窓会機関誌

Vol.20

小原台だより



第60期生 入校式

同窓会ホームページ URL : <http://www.bodaidsk.com/>

C O N T E N T S

■25年新春を迎えるにあたって ……………	3	■防大56期生に聞く	
■防衛大学校同窓会創立50周年記念事業について…	4	強く、たくましく……………	26
■新学校長に聞く		防大56期生に聞く ……………	27
暦を還す防大の新たな挑戦……………	8	防大56期生に聞く ……………	27
■副校長に聞く		防衛大学校を卒業して……………	28
防大の教育・研究は今……………	9	シーマンシップ……………	29
■新幹事に聞く		指揮官に大切なこと～Theory of everything～ ……	30
建学の精神に明治維新を観る……………	10	■連絡事項等	
■新訓練部長に聞く		平成23年度防衛大学校同窓会決算書 ……………	32
淡々と分を尽くす……………	11	会費納入状況、会費納入のお願い……………	33
■校友会活動(運動系・文化系)……………	12	機関誌「小原台だより」投稿のお願い……………	34
■同窓生アラカルト		機関誌「小原台だより」の配布部数縮減に対する協力について…	34
箱根駅伝応援の思い出……………	15	同窓会名簿管理に関するお知らせ……………	35
防大13期生のホームカミングデーによせて ……	16	期生会会長・代議員名簿……………	36
■今人生、男盛り		同窓会本部・支部等の役員紹介……………	37
まちに恩返しをしたい……………	18	会員の計報……………	38
スローライフ(夢物語?)……………	19		
デジタルオーディオの可能性……………	21		
一数学教師の独り言……………	24		

迎 25年新春を迎えるにあたって

防衛大学校同窓会会長
齋藤 隆
(14期・海上)



小原台新年号の巻頭言ということで書きながら、考えさせられました。現時点で書いたものが果たして新年の巻頭言として相応しいものになっているのだろうか。一昨年の3.11東日本大震災もそうでした。また尖閣問題に関してある程度予測はしていたものの、こんなにまで事態が悪化するとは。まさに一ヶ月先の予測もつきにくい現状において、この11月の時点で、平成25年の新春を迎えるにあたってと“のうのう”と書くことに抵抗を感じつつ、原稿をしたためています。

昨年は防大創立60周年という記念すべき年でありました。4月には60期生が防大の門をくぐりました。その一年生もすでに桜のマークを1つ付けようとしています。先日、防大協力会の役員の方と話す機会がありました。「もう防大も60期生になりましたか、実は私は陸軍士官学校最後から二番目のクラスで陸士60期でした」と目を細めながら感慨深げに語ってくれました。私は14期です、防大創立から日も浅く、なにか何時までも中学生、高校生のような未熟という感覚が抜け切れないのですが、同窓生の中には時代の流れの速さ、そしていつのまにか、自衛隊、防大も旧陸、海軍とほぼ同年代になってしまった。まさに熟年の判断力が求められる年代になったと感じておられる方々もおられるのではないのでしょうか。

さて、平成24年を振り返りますと、4月には国分新校長が着任されました。国分校長は中国問題の研究者であり、ご挨拶に伺ったとき、その造詣の深さに目から鱗の落ちる思いをいたしました。2月には九州支部、5月には東北支部の総会に参加させていただきました。それぞれ支部会長のもと、懇親と団結を深められていることに防大魂を感じたところでもありました。6月には、恒例の留学生と横須賀市民との焼き肉パーティーに参加しました。現在語学研修中の留学生を含め、80名近くの留学生が参加しました。特に東チモールからの学生は2年目になりますが、しっかりとした挨拶、コメントを日本語で述べていたのが印象深いものでした。

夏には、徳島に第三学年陸上要員の夏季訓練の激励に行っていました。新設された14施設大隊の隊長、そして支部長をはじめ、皆さまにお世話になりました。同窓会からは学生個人にとっては微々たる金額ですが、気持として三学年全員に夏季訓練激励金を渡しました。

また恒例の囲碁、テニス、ゴルフ大会が実施され、各期対抗戦に火花を散らしていました。

10月には、理事会を防大で開催、防大指導官との懇

談の機会を得ることが出来ました。色々と指導官のご苦勞話等を聞くことができました。同窓会としてどのような支援が出来るのか、具体的な話は、時間の関係から出来ませんでした。その中で特に父兄との関係に気を使われている様子が窺われました。

また留学生を支援する一環としてホストファミリー制度の話もでしたが、一部ご高齢になられているホストファミリーの方もおられ、どの様にホストファミリーを維持していくかも考えさせられました。同窓会の皆様の中で、このホストファミリーとして手を挙げていただける方は同窓会本部にご一報いただければと思っています。

秋には60周年開校祭が実施され、60周年記念行事の一環として、同窓会が記念館に植校長の肖像画と歴代校長のレリーフの贈呈、そして新築となった第一大隊学生舎前の植校長の胸像、学生綱領の碑等が移設に伴う整備事業の一部を支援させていただきました。このように振り返ってみると、あっという間の一年でもありました。

さて一昨年、三月十一日に発生した東日本大震災、この国難において、ここ防衛大学校で学んだ各級指揮官を中心とした陸・海・空自衛隊は初めての統合任務部隊を編成し、被災者の捜索・救助、生活支援等を整齊と行うことができました。まさに「小原台で同じ釜の飯を食べ、苦楽の体験を共有する」という、防衛大学校教育の真価が現れたものと考えています。

昨年は、今年こそは平穏な一年でありますようにと書きましたが、しかし一年振り返ってみると震災復興は緒に就いたばかりであり、福島原発を巡るエネルギー問題等これから長い年月にわたる努力の積み上げが必要であります。このような時期に、尖閣国有化問題に端を発した、日本の尖閣実効支配に対する挑戦、この問題は単純には解決のできない、まさに持久戦にもつれ込んでいくようにも思えます。いずれにせよ先行きは予想が付きません。

今年こそは平穏でありますようにとは書きません。現役を退いた同窓生としては、現役同窓生が東日本大震災の時のように、「想定外の最後の砦」にならないことを祈らずにはられません。

新年の巻頭言にはあまりふさわしくはありませんが、今こそ我々軍事のプロ集団である同窓生の冷静な発信力と対応力が求められていることを思いつつ、新年のご挨拶とさせていただきます。



防衛大学校同窓会創立50周年記念事業について

防衛大学校同窓会は昭和36年（1961年）1月に創立され、平成23年（2011年）に創立50周年を迎えました。同窓会ではこの節目の機会に合わせ多くの事業を実施してきましたが、本稿ではそれらについて会員各位にご紹介したいと思います。

1 事業計画策定までの経緯

同窓会創立50周年記念事業についての検討は平成18年に始まります。この当時は本事業について経費面及び事業面の両面からプレ検討を実施し、予算を努めて抑制しつつ、防大の充実発展に寄与する事業というよりは同窓会活動の充実発展に資する事業を重視して実施することが適当であるとされました。この成果は平成18年度代議員会（19年2月実施）に報告され、19年4月に準備委員会を組織して正式に検討を開始することとなりました。準備委員会の検討により「基本構想」が策定され、平成19年度代議員会（20年2月実施）に報告されましたが、その後防大から「防衛大学校開校60周年記念行事」（平成24年）への協力要望があり、検討の結果、同窓会会則（母校の充実発展に寄与）に基づいてこれに協力することとなり、基本構想の修正がなされました。これにより、同窓会の充実及び会員相互の絆の強化を図ることとともに母校防衛大学校の充実発展に寄与することが方針として加えられることとなりました。この成果は「記念事業実施計画（大綱）」として、平成20年度代議員会（21年2月実施）で報告されました。準備委員会では更に検討を重ね、平成21年度代議員会（22年3月実施）において「防衛大学校同窓会創立50周年記念事業計画」を報告し承認されました。この結果を受けて22年4月に実行委員会が組織され、各種準備を推進して行くこととなりました。

そして、22年度には「細部計画」が策定され、本事業を強力かつ整齊と実施して行く態勢が整いました。

平成	18	19	20	21	22	23	24	25
同窓会	意思決定 (代議員委員会等)	○	基本構想策定	承認	承認	○	50周年記念行事 (中止)	
	理事会 (事務局)	検討開始	構想案検討		経過報告	計画 上申	震災支援追加	
	準備委員会 及び 実行委員会		準備委設置	記念事業実施大綱	事業計画 答申	実行委員会 設置	(細部計画作成)	寄贈品準備
防衛大学校			60周年 協力要望					60周年 記念行事

2 事業計画の概要

同窓会創立50周年記念事業計画の概要は、次のとおりです。

<目的>

防衛大学校同窓会は創立50周年を迎えるこの機会に、半世紀にわたる同窓生の業績や同窓会発展の歴史を顧みることにより、同窓会の将来に対する決意を新たにする契機と捉え、創立50周年記念事業を実施して、同窓会の充実発展及び会員相互の絆の強化を図るとともに、母校の充実発展に寄与する。

<方針>

記念事業は、同窓会自体事業、地域支部支援事業及び母校支援事業に区分し、同窓会自体事業は主として22年度に、地域支部支援事業は22年度及び23年度に実施する。母校支援事業については、防大創立60周年記念事業と密接に連携し実施する。

<事業項目>

(1) 自体事業

- ① 記念行事の実施（23年3月13日（日）に記念講演会、記念式典・祝賀懇親会を実施）
- ② 同窓会旗及び表象の制定
- ③ 「小原台だより」特集号の発刊
- ④ 歴代学校長式辞集の編集
- ⑤ 同窓会業務史の整備

(2) 地域支部支援事業

地域支部等が企画する記念事業の助成

(3) 母校支援事業

- ① 記念品（絵画その他）の寄贈
- ② 『防衛の務め』復刻事業支援

<予算計画>

自体事業：800万円、地域支部支援事業：200万円、母校支援事業：1200万円（目安）母校支援事業は同窓会資金の取り崩しを避けられる範囲内で防大の要望に応じ対応

3 事業計画の変更

23年3月11日、この日は日本人にとって忘れようと思っても忘れられない日となってしまいました。東日本大震災の発生した日です。この大震災で被災された皆様に対し改めてお見舞いを申し上げます。同窓会は、この2

日後に創立50周年記念行事（記念講演会、記念式典・祝賀懇親会）を予定していました。しかしながら、東日本大震災により会場に予定していた明治記念館が使用不能になったこと、現役の同窓生が災害派遣中であること、及び交通機関の影響から本記念行事は中止となりました。この後同窓会として、「50周年記念行事（3月13日実施分）関連経費を被災者に対する支援金として送付」することが各代議員への文書による審議事項として付議・承認されました。これにより、自体事業の計画が一部変更となり、使用されなかった予算を活用して「被災同窓生に対する支援」が実施されることとなりました。

4 創立50周年記念事業実施状況

同窓会創立50周年記念事業は、24年12月1日現在で一部の事業を除き概ね完了している状況にあります。ここでは、各事業の成果についてご紹介したいと思います。

(1) 自体事業

① 記念行事

先にも述べましたが、本行事は東日本大震災の影響により中止のやむなきに至りました。準備万端完了し、後は実施を待つのみとなっていただけに残念ではありましたが。

ただし、記念式典において実施予定であった感謝状贈呈については、8個企業及び個人の受賞者にお送りしました。

② 同窓会旗及び表象の制定

団結の強化と士気の高揚を図ることを目的として同窓会旗及び表象を制定しました。

図案については、同窓会会員から広く募集し、母校との連帯を強調する市川氏の案をベースとし、実行委員会で選定後、22年10月の理事会において決定しました。

同窓会旗は、防衛大学校校旗をモチーフとし防衛大学校同窓会の文字を校章と同色で挿入するものであり、母校との連帯を強調したデザインとなっています。刺繍旗1式を同窓会本部用として作成したほか、印刷旗を同窓会本部及び各支部用等として作成し配布しましたのでご活用をお願い致します。

表象は、同窓会旗をベースにした円形、モノトーンの図柄とし、今回この表象を使用して50周年記念品を作成しました。



③ 「小原台だより」特集号の発刊

23年度及び24年度の「小原台だより」において同窓会創立50周年記念の記事を追加掲載し、同窓会50年の歩み及び50周年記念事業の紹介を実施しました。

④ 歴代学校長式辞集の編集

本事業は、歴代学校長の式辞を集大成し（楨初代学長については『防衛の務め』に掲載のため除く）、広く同窓生に閲覧を可能とすることにより、防大在籍当時の初心を顧み自己研さんの糧とすることを目的としています。

編集作業は、同窓会本部事務局内に編集委員会を設置し、田中宏巳防大名誉教授のご指導を得て、歴代学長の入校式・卒業式における式辞の校訂にあたりました。式辞の原文は話すことを前提に作成されたものですが、これを文章にするにあたり、読み易さを考慮しつつ努めて原文に忠実にすることとし最小限の編集を行いました。

本編集作業は現在も継続中ですが、その一部については同窓会ホームページに掲載しておりますのでご覧下さい。

⑤ 同窓会業務史の整備

同窓会の歴史を記録し将来の充実発展に資するため、同窓会の諸活動を年度ごとにまとめる作業を実施しています。本事業の一環として、同窓会50年の歴史を年表形式にまとめ、「防衛大学校同窓会50年の歩み」として23年度の「小原台だより」に掲載しました。

⑥ 被災同窓生に対する支援

同窓会では、使用されなかった50周年記念行事の予算を活用して、東日本大震災で被災された同窓生及び同窓生と生計を一にする家族に対して、弔慰金および支援金をお渡ししています。支援対象の範囲と金額は、死亡：10万円、住宅被害（全壊：10万円、半壊：5万円、一部損壊等：1万円）（死亡との重複は対象外）となっています。

24年12月1日現在のお支払い状況は、死亡：なし、住宅被害：76件（全壊：4件、半壊：26件、一部損壊：46件）で、合計216万円となっています。

被災された同窓生に対し改めてお見舞いを申し上げますとともに、不幸中の幸いですが同窓生ご本人についてご不幸のお知らせが無かったことを申し添えます

榎初代学校長の肖像画一式については、資料館の榎記念室にある榎学校長の胸像を建学の碑エリアに移設させるに伴い、胸像に替わるものとして寄贈しました。肖像画は、内閣総理大臣賞等の数々の賞を受賞されている肖像画家の吉田秋光氏にお願いし、荘厳な中にも温かみのある榎先生のご遺徳を感じさせる絵を描いていただきましたので、ぜひご覧になっていただきたいと思っています。



(2) 地域支部支援事業

本事業は、22年度及び23年度に地域支部等が企画する記念事業を助成し、同窓会が一体となって祝賀することにより団結を強化することを目的として実施しました。

その結果、14の支部等が講演会及び祝賀会等を実施し、それぞれに対し10万円程度の助成を実施しました。

(3) 母校支援事業

本事業は、母校防衛大学校の充実発展に寄与することを目的として、防大創立60周年記念事業と緊密に連携し、実施しました。

① 記念品の寄贈

記念品として防大から要望のあった、榎初代学校長の肖像画一式（展示ケースを含む）、歴代学校長のレリーフ及び新たに整備される「建学の碑」エリアに設置する榎初代学校長の胸像の台座等一式を寄贈し、約1050万円の経費を支出しました。これらの記念品は、24年11月10日（土）に実施された「防衛大学校創立60周年記念行事」の中の記念品除幕式において、榎初代学校長のご親族等のご来賓や齋藤同窓会会長及び國分学校長等がご臨席のもと、お披露目されました。



歴代学校長のレリーフについては、8代に亘る学校長のご功績を顕彰するものとして寄贈し、資料館内に設置しました。写真とは異なった趣のあるものとなっています。



「建学の碑」エリアの整備は防大創立60周年記念事業の最大の柱ですが、第1大隊学生舎の角地に御影石を敷き詰めたエリアを製作し、資料館にあった横初代学校長の胸像と、プール脇にあった学生歌碑（3期生寄贈）及び学生綱領碑（9期生寄贈）を移設するものです。

同窓会は、胸像の台座及び学生歌碑と学生綱領碑を御影石に埋め込みリニューアル工事一式を寄贈しました。また、胸像台座には横学校長の忘れえぬ言葉として「ノーブレス・オブリージュ（高い身分には義務が伴う）」の訓辞が刻まれています。

小原台に試練と挑戦の若き日を過ごした同窓生にとって、防大は生涯にわたり魂のふるさとと感じる所ですが、「建学の碑」はその精神の拠点として想を新たにさせてくれるものとなることでしょう。また防大生にとっても、その志と誇りを新たにすにあたり立ち寄るべき場所となるものと思います。ぜひ「建学の碑」を訪れていただきたいと思ひます。



② 『防衛の務め』復刻事業支援

防大が実施する復刻事業を支援するため、『防衛の務め』復刻版を約1200冊購入し、同窓会各部等、防大及び各自衛隊等に配布しました。

5 おわりに

防大同窓会は平成23年1月に創立50周年を迎えました。半世紀にわたる同窓会発展の歴史は、われわれ同窓生の志と努力の結集により築かれたものです。同窓会創立50周年記念事業を実施するにあたり、創立後半世紀の大きな節目に相応しい事業を、同窓生はもとより関係各位のご指導とご支援を頂きながら整育と完遂できたものと思ひます。折しも未曾有の被害を及ぼした東日本大震災における被災同窓生支援（会員相互の絆の強化）と防衛大学校創立60周年記念事業への寄贈品（母校の充実発展に寄与）は、他の記念事業の成果に加えて特筆すべき事業になったものと考えております。

同窓生各位におかれましては、今後さらに同窓会活動に対し、積極的に参画していただくとともに、あらゆる面からの建設的かつ積極的なご協力をお願いしたいと思ひます。

暦を還す防大の新たな挑戦



防衛大学校学校長
國分 良成

防衛大学校長に就任してから早くも7ヵ月が過ぎた。新しい出会いの連続であった。新しく出会ったのは、人であり、組織であり、それらを動かすシステムや理念、それに機能の仕方それ自体である。58歳にして、新たな人生の幕開けといっても過言ではない。幕末から明治を生き抜いた福澤諭吉は、「一身にして二生を経た」と語っているが、まさにそのような感を深めている。

この間、何はともあれ防大と防衛省・自衛隊という新たな職場に精通することに専念した。防大は実に学内行事が多い。それらに積極的に参加すると同時に、学生との各種の交流を最優先にした。慶應義塾在職中も、学生との交わりを他のすべての活動に優先させたが、これだけは防大でも守りたいと思っている。これは私の恩師の教えである。また、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地の自衛隊施設を視察し、研修を受けてきた。どこへ行っても防大卒業生が活躍している。彼らとの意見交換の時間を設けてもらい、学生時代を振り返り、後輩への思いと教訓を語ってもらう。すでに数多くの卒業生と会うことができたが、ここで得られた知見は今後の学校運営にきわめて有益である。

今年、防衛大学校は創立60周年を迎えた。還暦、つまり暦を還（かえ）す年である。設立当初、防大がここまでの隆盛を遂げるとは思われなかったかもしれない。防大に対する今日の高い社会的認知とその評価が証明しているように、防大の歴史は正しかった。もちろんこれは試行錯誤の結果であった。学生舎一つをとっても、大人数とすべきか少人数とすべきかの論争が時代を越えて繰り返されてきた。学生に自由な時間を多く与えるべきか、逆により厳しく時間を管理すべきかどうか、訓練をもっと強化すべきか緩めるべきか、校友会をどう運営すべきか等々、これらは時代と状況の変化に応じて永遠に続くテーマなのかもしれない。

61年目を迎える防大の学生教育はどうあるべきか。防大が一般大学と異なるのは、その目的が明確すぎるほど明確な点である。本校の卒業生は全員が幹部自衛官となり、日本国を守り、日本国民の平和と安全を保障する任

務に就く、これが本旨である。この点を踏まえて、7ヵ月という短期ではあるが、現段階までのところで今後重点を置くべきと私が感じた次の2点を記しておきたい。いずれも学生、教職員、訓練指導官、卒業生などとの接触のなかで得られた感触である。

第1に幹部自衛官となる以上、文化と教養を備えていなければならない。まず学生諸君の読書量が足りない。時間に余裕がないのではなく、そうした時間を作る精神的余裕がないように見える。読書は乱読でよい。必ずしも専門や防衛に関わるものでなくてもよい。また、我々が守るべき日本の文化を知らなければならない。そして自らの文化を愛する者は、同時に他者の文化についても尊重しなければならない。つまり世界の文化についても関心を失ってはいけない。文化と教養を備えることで人間の幅を広げ、魅力溢れる幹部自衛官とならなければならない。

第2に国際感覚を身に着けなければならない。そのために必要なことは、世界情勢とりわけ日本を取り囲む情勢に関心を寄せ精通するとともに、英語力特に会話力を向上させることである。今後、わが国はますます国際平和協力活動への参画が期待されている。国際社会の共通語は英語である。現在の防大生の英語レベルではその本来の能力からして低すぎる。防大生は全員が幹部つまりエリートとなるのであり、上位の学生だけがマスターすればよいわけではなく、すべての学生がマスターしなければならない。この点は多くの卒業生が学生時代にやるべきこととして最初に挙げている。

頂点にあるときにその上を目指さなくなると、進歩が止まるだけでなく一瞬に退化が始まる。よりよき防大の将来を目指して、今後とも学生、教職員、訓練教官、卒業生の間で熱き議論を交わそうではないか。

防大の教育・研究は今……



防衛大学校副校長（教育担当）
教授 井上 成美

同窓会の皆様、平素は本校に対するご理解とご支援をいただき、心より感謝申し上げます。私は、平成24年4月より教育担当副校長を仰せつかりました。重責を考えますと身も引き締まる思いではございますが、防衛大学校のさらなる発展のため、新学校長の國分良成先生のもと全力投球で任務を全うする所存でございます。

私は昭和49年に、現在の電気電子工学科の前身である電気工学教室の助手として本校に着任し、今年で勤続39年目となります。これまでは主として講義、実験、卒業研究など、現場において学生の教育に携わってまいりました。今回、学校運営の側面から防大教育を司るよう仰せつかり、いささか戸惑いを覚えつつも若き学生たちの将来を思い、益々意欲を燃やしているところです。折しも防大では平成22年度より、質の高い学生の確保・教育に関する検討が開始され、それらの中で特に注目されているのが「入試制度の見直し」です。今年度はこれを施行する最初の年であり、従来行われていました一般採用試験と推薦採用試験をそれぞれ二分し、一般（前期）、一般（後期）、推薦、総合選抜の計4種類の試験を行います。特に総合選抜採用試験は、幹部自衛官に必要な「知、徳、体」に関わる能力、資質、特性を潜在的にバランス良く兼ね備えた人材、すなわち潜在的リーダーを発掘することを目的とした新方式の試験です。実際に学生舎に宿泊させて、防大生活を疑似体験しながら適性を評価します。学力はもとより、適応能力、問題解決能力、基礎体力など多角的、総合的に評価するものです。また、11月に行われる一般入試については3月にももう一回、計二回実施し、より多くの受験の機会を与えて、質の高い学生を入校させることを目指します。

一方、研究科におきましてはその入学資格は、留学生を除けば、防大または一般大を卒業した幹部自衛官あるいは事務官等の防衛省職員に限られておりました。しかし平成22年より、一般大学の学部あるいは修士課程を修了した者で、我が国の防衛技術、安全保障に関心のある学生に対して、教育・研究に関わる補助的業務（リサーチアシスタント、またはティーチングアシスタント）に携わりながら、修士または博士の学位を取得することのできる特別研究員（非常勤職員）制度が発足しました。採用人数は若干名ですが、防大のキャンパスに新風を吹き込む役割も果たしています。さらに、受託教育として

留学生の他、他省庁、一般企業からも受け入れを行っています。本年度は特別研究員19名、留学生16名、留学生以外の受託学生7名が在籍しており、防大が如何に開かれた教育・研究活動を行っているかを物語っています。防大で教育を受けた様々の立場の学生が、帰国あるいは社会に出たときに、国民に自衛隊を広く理解してもらうための一助となるのはもちろんのこと、日本と外国との良き国際関係の構築、さらには防衛基盤の強化等、目に見えない将来の国家の財産になると思われま

さて、目を転じて防大教官の研究環境を眺めてみますと、平成21年5月、防衛省設置法改正案が成立して教官の研究任務が明確化されました。これに伴い、文部科学省科学研究活動に参加できるようになり、研究プロジェクトの代表者又は分担者となって研究資金（科研費）を獲得することのできる、一般大学との相互開放的なシステムが構築されました。防大におきましては平成21年度より毎年20件ほどの研究課題が採択され、科研費が支給されています。これらは防大の教育・研究が、一般大のそれに引けを取らぬ高いレベルを保っていることの証でもあり、延いては将来の幹部自衛官となるべき本校学生の質の高さを保証するものでもあり、在校生あるいは卒業生の皆様にとっても誇りとなるものであります。

時偶、“防大は大学かそれとも士官候補生学校か？”という問答がありますが、答えは言うまでもなく“防大は大学であり士官候補生学校である”です（量子論の“光は波であり粒子である”という説になぞらえて）。防大生は、「知、徳、体」の全てにおいてバランスのとれた優れた資質を身につける必要があります。どれ一つ欠けても立派な幹部自衛官と言えないのは申すまでもありません。したがって、防大の教官は一般大学と比べてより多角的に、そして当然のことではありますが熱意をもって教育に当たっています。

最後に、私が肝に銘じていることを申し添えます。それは、「学生が教官を選ぶ場面は多々あるが、教官は学生を選んでは（依怙鼻息すること）ならぬ」という、先輩教授の教えです。

今後とも防衛大学校に対する皆様方の熱きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

建学の精神に明治維新を観る

防衛大学校幹事

陸将 田邊 揮司良 (24期・陸上)



1 防大創立60周年と学生綱領

今年、防衛大学校は「還暦」を迎えました。創設60周年は防衛大学校にとって、干支で数えれば一巡し、新たな飛躍の年といえます。この節目の年に防衛大臣を勤められている森本敏氏は、防衛大学校9期生で学生綱領起草委員会委員長（8期生から引継）として、自主自律と個性の尊重を実現するため、「廉恥・真勇・礼節」を標語とし、学生自らに課した目標にして自らを律する規範「学生綱領」を完成させられた責任者であることに輝かしい縁を感じます。この建学の時代に思をはせつつ、改めて母校の精神を最近の自衛隊の活動を通じて考えてみました。

2 東日本大震災における自衛隊への高い評価と防衛大学校建学の精神

昨年3月に東日本太平洋沿岸で発生した未曾有の大災害における災害派遣活動により、自衛隊は国内外から高い評価と、国民からの絶大な信頼を得て「最後の砦」とまで評された。様々な困難の中で、ここまでの活動が遂行できたのは、もちろん自衛隊という組織力と日頃の教育訓練の成果であることは間違いありません。一方で現代日本において失われつつある、古き良き日本人が残っていると評される自衛官には、卒業生が建学の精神を忘れず自衛隊で勤務し、それが多くの自衛官に感化され、民主主義時代の自衛隊内で共有されてきたからではないかと思う。

(1) 建学の精神 — 「自主自律」 —

この60周年という節目の年に、防衛大学校は國分良成慶應義塾大学法学部長を第9代学校長にお迎えした。國分学校長は、着任後、まずは卒業生が勤務する部隊の現状を自分の目と体で確認し、卒業生たちの声を直接で耳にしたいとの思いから多くの部隊をご視察して頂いている。私も5月に岩手駐屯地で第9師団長として学校長をお迎えし、親しくお話をさせて頂いた。そして、「防衛大学校長への就任を決めたのは、東日本大震災災害派遣において福島第一原子力発電所に、陸上自衛隊のヘリが放水したのを見た瞬間だった」というお言葉に、甚く感動したことを覚えている。

慶應義塾の創設者である福沢諭吉は『学問のすすめ』の中で、欧米の富強なる環境下においても、「国と国とは同等である」「一身独立して一国独立する事」との気概で道理をもって国際社会に望むことを熱く語っている。これは、列強による植民地化の脅威の中で、

それまでの支配階層の武士だけではなく、広く一般国民から有能な者を集め国家を担う志の高い人材を育成することが急務であったものと思われる。そして、第二次世界大戦敗戦後の日本で、教育勅語や軍人勅諭が廃止された中、戦後民主主義の新たな軍人像の規範として、再び明治維新に立ち返り、横校長が建学の精神として掲げられた「自主自律」に繋がっているのではないかと思う。（これは、防大創設時に吉田茂元首相は、「防大生に与う」（雑誌小原台第7号）において、防大生に、“一国独立を守る決心独立を守る決心”を求めていることから伺える。）

自主自律の精神は今回の震災対応においても十分に発揮され、上級部隊から示される任務に対して、今までにない現場の課題に自ら取り組み、命を賭して行動した。これが、細部まで上からの指示を待って動いていたのでは、助けられる者も助からない。また、機能が低下した自治体の機能の支援や関係機関とも連携を密にしつつ、組織文化の違いを乗り越えて行動した。これも、広い視野と自身の自律がない限りできないことである。

(2) 建学の精神 — 三軍統合教育 —

統合運用が平成17年度末に開始されて以来、緩やかな関係であったが初めて統合任務部隊が編成され、見事任務を達成した。これは、司令部内等で、一般大学卒業生等を含めて同期というだけで、陸海空の組織の垣根を越えて情報交換が行われ、スムーズに業務調整が行われたことが大きい。自衛官には、同じ釜の飯を食った仲間として助け合う精神が根付いている。吉田茂が拘ったこの制度は、その先見性とともにも有効性が明らかとなった。

3 おわりに

自衛隊は、国際貢献活動においても国内外から高い評価を得ている。「日本国を守る、日本国民を護るという精神をもって……。さらに進んで、人間として世界と人類にという広い視野に立って、諸君が常に任務を遂行されんこと……。」という防衛大学校第1回卒業式での吉田茂の言葉の先見性にさらに驚かされている。私は、防衛大学校の建学の精神に明治維新を観ることで、自衛官の規範を感じ、今後の厳しい時代においても、後輩たちが必ずや立派に任務を果たすことを改めて確信した次第である。

淡々と分を尽くす



防衛大学校訓練部長
海将補 岡 浩 (27期・海上)

平成24年7月26日付で訓練部長に着任しました。学校長からは「建学の精神に基づき、学生を鍛えてください。」というお言葉を頂きました。今の4学年が57期生であり、27期生である私の30年後輩になります。私が4学年の時に30周年を迎え、今年が60周年です。

前配置は、海上自衛隊呉地方総監部幕僚長でした。防大着任前の5月19日に呉・海上保安大学校において全日本カッター競技会が行われ、短艇委員会は圧勝で2年ぶりの優勝を勝ち得ました。短艇委員会出身の私は、OBとして現地で支援に従事することができましたし、母校の活躍を目の当たりにする貴重な機会となりました。それだけでなく、カッターが防大卒業生全員にとって苦しい思い出を共有する種目だったからかもしれません。大会当日は、短艇委員会OBだけでなく、呉・江田島を始めとする広島地区の防大OBが陸海空問わず多数来場され、卒業生は、自衛隊を退職してもその原点が防大にあると感じていることがよくわかりました。

着任してみますと、何かと30年前との比較が自らの判断基準となってしまいます。私が学生時代の合同朝礼は陸上競技場で実施されていましたが、現在では記念講堂という室内で実施されています。この記念講堂を始め、図書館、資料館、諸会議室と施設の充実度の高さを感じます。新学生舎も4コ大隊すべてが完成し、この4月から全大隊で8人部屋での生活となりました。施設の充実度だけでなく、学生の気質、体力増強訓練参加者の多さ、留学生及び海外派遣学生を含めた国際交流の活発化から日朝点呼やパレードの練度に至るまで変化を感じます。一方で、私自身自衛隊で約30年勤務し、特に六本木・市ヶ谷勤務や自衛艦隊司令部勤務時に陸海空一緒での教育が如何に大切だったかを感じました。また、着任早々に実施された遠泳で完泳した赤帽2名を含んだ1学年、競技に向けて大隊の勝利を目指して健闘する学生、初めて定期試験に臨む1学年を指導する4学年、防大の名を背負って校友会活動に臨む学生等の姿は、将来の幹部自衛官、すなわち指揮官の姿に通じるものとして、建学以来の伝統・精神が脈々と受け継がれていることを感じます。

学生には「淡々と分を尽くす。」という言葉を紹介しました。「淡々と」は私自身、自衛隊で勤務していると、様々な意思決定・情勢判断時に多くの上司等からのご指導で自然と身に付いた単語です。国語辞書での意味に加

え、そこには、私心なく、何かに偏ったりせず、感情に左右されず、忠実に任務を遂行する姿勢が含まれていると思います。「分を尽くす。」は英語で「DO ONE'S DUTY」です。言うまでもなく、学生は我が国の安全保障を陸海空の分野で背負う幹部自衛官となるわけであり、現下の情勢に一喜一憂せず、その本文を尽くしてもらいたいと思っています。この2つの単語を組み合わせると「淡々と分を尽くす。」としたものです。30年前の学生時代、当時は冷戦構造真っ只中であり、3海峡封鎖という単語もあった程でした。当時の学生は誰も冷戦が間もなく崩壊するとは思っていませんでしたし、その後、これほど海外派遣任務が増加するとも思っていなかったはず。しかし、安全保障環境の変化は速く、自衛隊の活動範囲は拡大し、実任務も増加しました。そして、その場その場において、指揮官を始めとする各配置で中心となって活躍しているのは、この小原台で学んだ多くの防大出身者であることは間違いありません。すなわち、学生時代に、自らが将来の自分を予見してそのためだけに備えておいたものではなく、学生の本分である勉学、訓練、校友会活動、学生舎生活に全力を尽くし、その積み重ねが、将来与えられた任務を完遂することを可能とし、それによって我が国の安全保障に貢献することができるのだと思います。

訓練部長として、主として訓練、学生舎生活、校友会活動等を担当します。訓練では良い部隊指揮官となるための基礎的な精神資質と訓練能力を、学生舎生活ではその資質を練磨する修養の場とし、校友会活動は学生全員が自主的に必ず参加する気力体力およびリーダーシップ練磨の場として、将来の陸海空幹部自衛官を育成のために努力したいと思います。母校で勤務できる喜びを胸に、これだけの人材を約2千人を預かっているのですから、「やがて」のために「たえず」、「知・徳・体」兼ね備えた将来の幹部自衛官の育成に私自身淡々と分を尽くしてまいります。



校友会活動

平成24年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況
校友会代議員会	32名	○運営要領の見直し等の審議
校友会学生会員会	17名	○校友会学生委員会業務の徹底
雑誌委員会	7名	○小原台93号の作成準備
儀仗隊	51名	○古河駐屯地創立記念行事・北富士駐屯地創立記念行事への派遣 ○月例観閲式でのドリル展示
応援団リーダー部	13名	○第56回全日本カッター競技大会、相撲部、硬式野球部の応援 ○少林寺拳法、短艇委員会、女子ホッケー、アメフトへの壮行会 ○文化部合同発表会演武、弥生苑特別演舞
柔道部	51名	○日本ベトナム友好柔道大会：411(3)井浦2回戦敗退 ○平成24年度関東学生柔道優勝大会：男子2部準決勝進出 ○全国国公立大学柔道優勝大会：決勝リーグ1回戦敗退
剣道部	63名	○第58回関東理工科系学生剣道選手権大会 ・団体戦男子3位(39校出場) ・女子個人戦442(2)持丸優勝(65名出場)、312(4)田村第3位 ○第57回春季神奈川県学生剣道選手権大会 ・団体戦男子3位(9校出場) ・男子個人戦232(3)奥田4回戦敗退(91名出場) ・女子個人戦433(1)岡田第3位(67名出場) ○東京大学との定期戦：男子団体：勝利、女子団体：勝利
空手道部	46名	○第39回横須賀春季空手道選手権大会 ・団体戦準優勝(10団体参加) ・個人組手311(4)大原準優勝(58名出場) ・個人形412(4)中村準優勝(50名出場) ○第50回全自衛隊空手道選手権大会 ・個人形412(4)中村優勝(97名出場) ○第56回春季横須賀市民戦 ・個人型412(4)野尻優勝(14名出場)、112(3)立石優勝(12名出場) ○春季関東学生定期リーグ戦 ・男子団体2部残留 ・女子団体2部残留 ○第67回国民体育大会関東ブロック大会 ・個人組手311(4)大原第3位
銃剣道部	50名	○第56回全日本銃剣道大会 ・一般第2部防衛中学校Cチーム準優勝(9チーム参加) ○第43回全日本青年銃剣道大会 ・団体戦1部最高成績4回戦敗退(231チーム参加) 2部最高成績第5位(115チーム参加) ・個人戦(女子)：111(3)濱田第3位(女子78選手参加) ○第52回全関東銃剣道大会 ・団体戦神奈川県チーム第3位
合気道部	60名	○全日本合気道演武大会参加 ○法政大学との合同稽古
相撲部	16名	○横浜市春季相撲大会 ・団体戦社会人一般の部準優勝(4チーム参加) ○第30回全国国公立対抗相撲大会 ・団体戦優勝(9チーム参加) ・新人戦の部：243(1)アマルボルド準優勝(23名参加) ・女子個人の部：131(4)古川優勝(2名参加)、331(2)佐藤準優勝 ○第91回東日本学生相撲選手権大会 ・団体戦Cリーグ優勝(6チーム参加)、Bリーグ1回戦敗退(8チーム参加) ○第39回東日本学生相撲個人体重別選手権大会 ・65kg未満級の部111(2)セレグレン準優勝、243(1)アマルボルド第3位、321(3)野村、213(1)杉野ベスト8(16名参加)

校友会名	部員数	活動状況
相撲部	16名	・75kg未満級の部241(4)ソラウィットベスト8(24名参加) ○第61回東日本学生リーグ戦 ・二部リーグ第8位(8チーム参加)三部リーグ降格 ○第37回全国学生個人体重別相撲選手権大会 ・65kg未満級の部111(2)セレグレン準優勝(16名参加)
居合道部	13名	○居合道国際連盟高段者研修会及び合同稽古参加 ○第31回無双直博英信流居合道関東大会 ・五段の部312(4)川崎学生優勝(2連覇) ・初段の部312(4)酒井学生優勝、443(1)渡邊学生準優勝
弓道部	38名	○神奈川県学生弓道連盟春季男子リーグ：4戦(2勝2敗) ○神奈川県学生弓道連盟春季大会 ・女子団体・個人戦442(2)山中第4位 ○全関東学生弓道選手権大会 ・女子団体戦決勝トーナメント2回戦敗退 ・女子個人戦442(2)山中予選通過
少林寺拳法部	61名	○第49回関東学生大会 ・組演武(茶帯の部)211(2)戸本、412(2)宮里最優秀賞(30コ組中) ○昇段審査：2段昇格2名、3段昇格1名 ○少林寺拳法神奈川県大会 ・一般男子級拳士の部最優秀賞 ・団体演武の部最優秀賞 ・一般男子2段の部最優秀賞 ・一般男子3段の部最優秀賞
バスケットボール部(男子)	40名	○春季神奈川学生リーグ戦：2部準優勝(10チーム参加) ○関東大学バスケットボール新人戦参加
バスケットボール部(女子)	7名	○春季神奈川学生リーグ戦2部第5位(8チーム参加)
ラグビー部	153名	○筑波大学、防衛医科大学校、東京大学、京都大学との定期戦 ○関東学生3部リーグにて昇部を目標
サッカー部	46名	○総理大臣杯参加 ○三浦半島リーグ3部B優勝 ○春季神奈川大学サッカーリーグ戦：第5位(10チーム参加)
バレーボール部(男子)	31名	○春季神奈川リーグ戦1部第4位 ○春季関東リーグ戦7部第4位
バレーボール部(女子)	27名	○春季神奈川リーグ戦2部準優勝(1部昇格) ・個人賞442(4)北スパイク賞、241(2)勇サーブ賞、131(3)岳下リベロ賞 ○春季関東リーグ戦8部
卓球部	16名	○平成24年度春季関東学生卓球リーグ参加 ○平成24年度秋季関東学生卓球リーグ参加
陸上競技部	121名	○神奈川県記録会兼国体選考会 ・800m441(3)加藤第1位 ・800m332(4)岡本第3位 ○第44回関東理工系対抗陸上競技会：男子総合2位(前年度5位) ○全自陸上参加 ・400m男子決勝241(4)中村第2位 ・800m男子決勝332(4)岡本第8位
硬式庭球部	65名	○第43回会長杯テニス選手権大会 ・準決勝進出：112(4)ロン、231(2)甲斐、321(2)吹金原 ・決勝進出：211(3)石津、232(3)荒木 ・ブロック優勝：332(4)荒金、122(3)緒方、422(2)吉田 ○全自衛隊関東地区予選大会(松原杯)：優勝332(4)荒金 ○全自衛隊関東地区大会本戦：関東地区第2位(2勝1敗)
硬式野球部	56名	○神奈川大学野球春季2部リーグ221(3)大橋打点王 ○神奈川大学野球秋季2部リーグ戦

平成24年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況	校友会名	部員数	活動状況
射撃部	19名	○関東学生ライフル射撃春季大会 ○関東学生ライフル射撃選手権秋季大会予選 ・50Mライフル3姿勢20発競技322(4)谷山第6位	体操部	37名	・個人男子242(4)西川7位58名、女子121(3)松原4位23名 ○第53回神奈川県大学体操競技選手権大会 ・団体男子A2位/6チーム、男子B5位/6チーム、女子2位/2チーム ・個人男子442(4)大森7位37名、女子121(3)松原4位/11名
水泳部(競泳)	36名	○第5回グリーンプールカップ水泳選手権大会 ・100m背泳ぎ112(3)高橋第1位 ・100m平泳ぎ111(4)中路第1位 ・400m自由形142(3)山田第1位 ○第56回東日本理工科系大学選手権水泳競技大会：総合3位 ○第59回東部地区国立大学選手権水泳競技大会：男子総合2位、女子総合4位 ○59回全国国立大学選手権水泳競技大会 ・男子400メートル自由形142(3)山田第3位	フェンシング部	23名	○第65回関東学生フェンシングリーグ戦大会 ・フルール団体戦3部リーグ第2位(4勝1敗) ・エベ団体戦3部リーグ第2位(3勝1敗) ○2012年春季関東国立フェンシング大会 ・フルール団体戦第4位 ・エベ個人戦132(2)高田優勝、441(3)根岸ベスト8 ○第48回全国国立フェンシング大会 ・エベ団体戦6位 ・フルール団体戦12位
水泳部(水球)	21名	○平成24年度関東学生水球リーグ参加	ウエイトリフティング部	13名	○顕著な活動成果なし
ハンドボール部	31名	○平成24年度関東学生ハンドボール春季リーグ大会 ○関東学生ハンドボール春季リーグ入れ替え戦：防大19-25千葉大 ○横須賀市民ハンドボール大会	バドミントン部	48名	○平成24年度神奈川リーグシングルス戦 ・2部211(3)青木準優勝 ・3部131(4)長谷部準優勝 ○平成24年度春季神奈川リーグダブルス戦 ・3部131(4)長谷部241(3)佐藤第3位 ○平成24年度秋季関東リーグ第5部リーグ優勝(6戦6勝) ・9/30入替戦(3-0勝利)(4部昇格) ・優勝予選第1：1位/4校中：11分28秒、決勝：1位/4校中：10分54秒。 (歴代2位、圧倒的な優勝。(応援団を結成：学生委員会、応援団リーダー部、吹奏学部、短艇委員会の学生)
アメリカンフットボール部	75名	○キャロルトボウル：防衛大30-9朝霞ボウルオールスターズ ・422(3)養田大会 MVP	短艇委員会	59名	○第55回五大学レガッタ ・エイト4艇中3位 ・フォア4艇中3位 防大ボート部が5年に一度の幹事校として大会等の運営した。(五大学：筑波、東工大、東京海上大、東京外語大。) ○第39回日本大学選手権大会準決勝 ・エイトB4艇中4位
ソフトテニス部	37名	○平成24年度神奈川県春季学生リーグ戦：3戦2勝1敗準優勝1部残留 ○全日本社会人大会県予選大会：準優勝/8ペア ○平成24年度関東学生ソフトテニス春季リーグ戦及び関東学生ソフトテニスシングルス選手権：第4位(2勝3敗)、5部(12部中)残留 ○関東学生ソフトテニス選手権2部トーナメント：222(4)久田241(4)新濱組第3位 ○国民体育大会静岡県2次予選：232(3)佐藤リーグ戦第1位 ○第32回全日本学生ソフトテニスオープン選手権大会：ベスト16 ○国体参加：・232(3)佐藤(静岡県代表として参加)初戦敗退	ボート部	39名	○第55回五大学レガッタ ・エイト4艇中3位 ・フォア4艇中3位 防大ボート部が5年に一度の幹事校として大会等の運営した。(五大学：筑波、東工大、東京海上大、東京外語大。) ○第39回日本大学選手権大会準決勝 ・エイトB4艇中4位
ボクシング部	69名	○平成24年度第10回神奈川県一般ボクシングオープン戦 ○平成24年度関東リーグ3・4部入れ替え戦 ○国体県予選 ・松木1回戦敗退 ・斎藤・佐野1回戦勝利、2回戦敗退 ・長瀬選手1回戦勝利国体関東予選出場	ヨット部(小型)	27名	○関東学生ヨット秋季選手権大会決勝進出へ向けての練成
レスリング部	23名	○平成24年度東日本学生レスリングリーグ戦 ・2部リーグ優勝：312(4)小松2部最優秀選手 ○平成24年度東日本レスリング春季新人戦大会 ・フリースタイル55kg級B131(4)吉川準優勝 ・フリースタイル60kg級B232(2)吉村準優勝、432(2)牧野第3位 ・フリースタイル74kg級B442(2)阿部優勝 ○9月に韓国強化練習合宿(東日本レスリング協会主催)に学生2名が参加(初) ○国体参加：142(3)松尾(神奈川県代表として参加)初戦敗退	ヨット部(クルーザー)	19名	○第1回ヨット部部内戦 ○第2回ヨット部部内戦
フィールドホッケー部(男子)	41名	○関東学生ホッケーリーグ順位決定戦防大2-1成城大 ○関東学生ホッケーリーグ2部男子順位決定予選防大2-0専修大 ○関東学生ホッケーリーグ2部男子順位決定戦防大0-2武蔵	山岳部	4名	鷹取山(神奈川県返子市)、瑞牆・金峰山(山梨県北杜市)、大学生登山リーダー春山研修会(富山県)、鳳凰三山(山梨県韮崎市)、三ツ峠山(山梨県富士河口湖町)、白馬岳(長野県白馬村)登山
フィールドホッケー部(女子)	18名	○春季関東学生ホッケーリーグ：女子2部第2位 ・順位決定戦防大0-4津田塾大2部準優勝 ・1部2部入替戦(8コチーム中)防大0-5東海大2部残留 ・個人賞 321(4)岸田、441(4)二村得点王 122(3)片岡、441(4)二村アシスト賞 111(4)山木、321(4)岸田ベストイレブン 321(4)岸田敢闘賞	ワンダーフォーゲル部	21名	○槍ヶ岳夏合宿
準硬式野球部	46名	○平成24年度神奈川県大学準硬式野球春季リーグ ○平成24年度神奈川県大学準硬式野球春季リーグ戦入れ替え戦：防大4-6横浜国立大 ○平成24年度神奈川県大学準硬式野球3大学新人戦：防大4-14関東学院大	グライダー部	15名	○長野滑空場におけるフライト ・322(3)小林滑空徽章C章 ○木更津滑空場におけるフライト ・232(2)川地滑空徽章A章獲得条件達成 ○アメリカでの滑空(個人練習)
体操部	37名	○第27回東日本学生体操競技グループ選手権大会 ・団体男子5位/15チーム創部以来の快挙。9年ぶり日本インクル出場権獲得 ・個人男子442(4)大森23位/109名 ・個人女子121(3)松原39位/66名 ○第45回理工系大学体操競技選手権大会 ・団体男子A4位/8チーム、男子B5位/8チーム、女子2位/3チーム	パラシュート部	8名	○水上着水法の技量取得(学生9名) ○アメリカでの降下(個人練習) ○人命救助処置講習(夏合宿時)(茨城県大利根飛行場) ・主務141(4)山下 ・顧問加藤3佐 ○走水小学校への古パラシュート寄贈(小学校からの要望) ○開校祭パラシュート記念降下
			自動車競技部	24名	○自転車競技部への昇格(24.6.12) ○第21回新島トライアスロン大会参加 ○BikeNaviGP2012「春のひたちなか7エンデュロ」参加(学生5名) ○2012JCRCロードレース第4戦in日本CSC(伊豆・修善寺)参加(学生3名) ・F2クラス221(3)貞井第2位
			吹奏楽部	35名	○月例観閲式等学校行事での音楽隊としての活動 ○聖シリア小学校チャリティコンサートでの演奏神奈川県からの依頼 ○防大吹奏学部定期演奏会(横須賀)

平成24年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況
新聞委員会	0名	活動なし
放送委員会	15名	○各種学校行事放送支援(入校式を含めた各種行事)
アカシア会	20名	○文化部合同発表会に向けた練習
模型制作同好会	9名	○文化部合同発表会、開校祭に向けた模型製作活動
自動車同好会	10名	○関東学生対抗軽6時間耐久レース参加 ○信州スポーツランドのコースライセンスを新たに3名取得
写真映画研究部	11名	○各種行事支援(写真撮影) ○文化部合同発表会、開校祭に向けた練習
コンピュータ研究同好会	13名	○文化部合同発表会、開校祭に向けた練習及び当日の発表 ○情報処理技術者試験(春季)の受験合格者1名142(4)佐藤
美術同好会	7名	○活動成果：文化部合同発表会で作品を展示
弁論部	2名	○顕著な活動成果なし。
国際関係論研究部	9名	○八王子セミナー参加：共通テーマ「世界とアメリカ」 ○開校祭における「論文発表」の準備
軍事史研究部	6名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
防衛学研究同好会	16名	○八王子セミナー参加：共通テーマ「世界とアメリカ」 ○模擬発表会・模擬討論会 ○他大学との討論会
茶道部	10名	○文化部合同発表会、開校祭での発表 ○国際防衛学セミナーにおける「茶会」支援
英会話部	9名	顕著な活動成果なし。(文化部合同発表会はエントリーのみ)
棋道部	17名	○文化部合同発表会、開校祭での発表 ○春季関東学生囲碁団体戦5部7校中4位 ○段位認定大会 ・122(3)光安二段合格
音楽部	38名	○文化部合同発表会での発表 ○開校祭(文化祭・大隊ステージ)への参加(1日目のみ) ○「横須賀芸術劇場合唱団第九演奏会」への参加
軽音楽部	14名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
古典ギター部	8名	○文化部合同発表会での発表
文芸同好会	7名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
詩吟同好会	5名	○横須賀市内吟詠大会3位審査会による各学生の段位取得
書道同好会	12名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
生花同好会	0名	○活動なし
心理研究同好会	4名	○顕著な活動成果なし
紅太鼓同好会	10名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
ダーツ同好会	16名	○文化部合同発表会での発表
タイ文化研究同好会	29名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
韓国文化研究同好会	12名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
インドネシア文化研究同好会	9名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
ベトナム文化研究同好会	26名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
モンゴル文化研究同好会	13名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
カンボジア文化研究同好会	8名	○文化部合同発表会、開校祭での発表
東ティモール文化研究同好会	8名	○文化部合同発表会、開校祭での発表





同窓生アラカルト

箱根駅伝応援の思い出



中島 一光 (8期・海上)

少し前まで正月は、「炬燵に入って蜜柑を食べながら箱根駅伝を見る」のが定番であった。

最近ではエアコンの普及に伴い炬燵は姿を消しつつあるが、箱根駅伝の人気は根強いものがある。

何の利害関係も無い人々は、「今年は〇〇大学が強い！」などと気楽に見ているが、出場している大学の関係者や卒業生は切齒扼腕しつつ手に汗を握って見ているのであろう。

それ以上に複雑な思いで見ているのが、「出場出来なかった学校の関係者」であろう。「予選会でもう少し良いタイムを出していれば出られたのに……」と残念な思いから「見たくない！」との気持ち半分でテレビをつけている人も多いと思う。

かく言う小職も防大が出ていないことに一抹の寂しさを感じつつ「眺めて」いる。他の同窓生も同様の思いをされていると思うが、最近では「優秀なランナーを名指しで採ることが出来ない防大では所詮無理」として諦めている人が大半となってしまったのではなかろうか。

「防大には箱根駅伝はとても無理」と考えている諸士に、かつて防大が箱根路を走ったことが有ったことをお伝えしたい。

昭和36年の正月に5期生を中心に陸上部が黄金期を迎え、予選会を突破して待望の箱根路を走る権利を得たのである。当時1年生であった小職も出来たばかりの応援団に加えて戴いていた関係で、沿道で応援する機会が与えられた。特に1年生にとっては、貴重な正月休みを割くことは残念な面も有ったが、それ以上に「箱根の応援ができる」ことに感激し、早起きをして集合地点に駆けつけた次第である。

寒風の中、制服姿で（外套は着用せず）整列して応援を始めると身が引き締まり、自分が走る訳でもないのに気持ちが高揚してきた。

出発点で応援を始め、スタート後には裏道から車で先回りして「沿道の適当な地点」で応援し、また先回りすることを繰り返しながら選手と共に少しずつ箱根へと近づいていった。

常連校と比べると力の差は如何ともし難く、徐々に差が開き閑散とし始めた沿道を走る姿に心を痛めると共に

「このような時こそ応援が必要だ！」と思い、声を限りに応援し続けた次第である。

帰りは「繰り上げスタートの繰り返し」であったため、十分な応援が出来なかったことから記憶も曖昧になってしまった。多人数の応援団を擁する他校では箱根のゴール付近で迎えることも可能であったろうが、数人のメンバーの我が校は「裏道から先回り」の方策しか取れないので、裏道の無い？箱根山では先回りしたりゴール付近で迎えたのか、どこかで宿泊したかなどの記憶も曖昧な状態である。

高校時代から「ランナーとして鳴らした」ような人が居ないにも拘わらず、出場を果たした諸先輩の御努力は並々ならぬものがあつたのであろう。箱根路を走ることが全てと言う積もりはないが、「一つの目標に向かって全員がベクトルを合わせて盡力する」ことにより一見不可能と思われることを可能にした「先人の努力」を見習い「もう一度箱根に挑戦」してみるのもよいのではないか。

空前の快挙を絶後としてはならぬ。紅顔の美少年？を白頭の翁と変えてしまった50年の歳月は、「高嶺の花」として無為に過ぎ去ってしまったが、後輩諸士には是が非とも「現実」として戴きたい。

応援しかやらなかった小職と異なり、実際に箱根路を走られた諸先輩にその御感想を伺いたいものである。今も尚、血潮が滾っておられるのではなかろうか。たかが走るだけと言われそうな中に「無限の可能性を信じて盡力する若人」の姿があり、我々の青春の日々に通じる何かが有るように思えてならない。

もう一度、同窓の諸士と共に箱根路で声を限りの声援を送りたいものである。



防大13期生のホームカミングデーによせて



篠田 芳明 (13期・陸上)

平成24年3月18日、第13期生が防衛大学校長から本科第56期生卒業式を機にホームカミングデー（以下、HCDと称する）として小原台に招待された。

昨年の12期生HCDには、東日本大震災直後のため、参集出来た方が限定されて気の毒であった。被災者の中には本人を含む多くの親族・友人も含まれており、その心情や、極限状態で災害に対処している我々の後輩自衛官の労苦を鑑み、止むを得なかった。この震災による多くの死者・行方不明の方々を悼むとともに、被災して今なお困難な生活を強いられている方々に同情の念を禁じ得ない。

さて、昭和44年3月22日に第13期生として防衛大学校を卒業し、小原台を巣立ってから早や43年にも及ぶ歳月が経過してから再会した我々は、陸・海・空自衛隊あるいは其の他の重要な職責を担って精励して来たが、その職務を全うし日本の平和と独立に貢献できた充実感を胸に、お互い懐かしい顔を合わせた。このHCDに、我々13期生の参集者は家族を含め約330名であった。



防衛大学校におけるHCDについての行事の内容や久しぶりに母校を訪問した印象は、先輩諸兄が毎年記述されている事と大差がないので、本稿ではその重複を避け、卒業後43年の歳月を経てHCDを迎えた我々が、今改めて感じる小原台の素晴らしさを述べてみたいと思う。

我々が防衛大学校に入校した昭和40年は、東京オリンピック開催の翌年であり、日本の経済成長が将に花開かんとしていた時期である。しかし、一方では学生運動が活発に繰り広げられ、多くの大学では落ち着いて勉学出来ない様な雰囲気であった。学生運動と言う名目の無

法行為を若者の特権や流行と称する風潮が当時の日本社会を覆っていた。

一方、小原台に在籍する我々は、その対極にある静かな別天地で日夜、勉学や訓練・校友会活動に持てる限りの若いエネルギーを発散して、気力・体力・知識・見識・胆識の錬磨に余念がなかった。

それから約半世紀が経過して、今の日本のリーダーがどのように育ち結果を出したか？私の見方には大雑把で手前味噌過ぎる嫌いはあると思うが、昨今の日本各界の低迷は学生運動に熱を出していた層がリーダーとなった時期に重なるように思える。

一方、阪神淡路大震災や東日本大震災等の大災害に対処した事を例にとるまでも無く、それまで数々の事案にも素晴らしい活躍をしている自衛隊の原動力は、有能な幹部自衛官のリーダーシップに負う事は論を待たない。その意味で、幹部自衛官を養成する防衛大学校の徳育・知育・体育の重要性と其の素晴らしさが改めて認識できる。

その様な防衛大学校の教育・訓練の場でも、他の大学には無い最も素晴らしいと思える特色は、全寮制で学生隊を組織し“廉恥・真勇・礼節”を精神基盤として、学生の自治が確立している事である。我々の卒業後、色々変遷があったと聞いているが、当時は1年生から4年生まで基本的には各学年二人が同室で生活する各室八人の構成であった。



日々の学生生活に於ける躰事項について1年生は（旧軍で言う初年兵として）全てを上級生から教えられ、四六時中その実行状況が監視され、不備な事が目に留まると直ちに厳しい注意を受ける。学生は日々目を見張るほ

ど成長する年代であるから、各学年の気力・体力・知識・見識・胆識において1学年も違えば上級生には全く歯が立たない。そのため下級生は上級生を尊敬し、自分もこの上級生の様に立派になろうと努力する事になる。一方、上級生も下級生を指導監督する立場で狭い同室に24時間接しているため、行動の模範となるべく、下級生に優位を保とうとする意識が芽生え、自発的に気力・体力・知識・見識・胆識を錬磨する事になる。

このように、上級生も下級生も逃げ場のない狭い空間の中でお互いを鋭く監視し見つめ合って磨かれて行く事になる。勿論、若さゆえの間違いも時にはあるが、全ての学生が立派な幹部自衛官を目指している若者であり、大局的には些事であって、この年代の教育にこれほど効果的な方法は他に類を見ないと思う。また、このように多少窮屈な四年間の小原台生活こそ、親元で我儘に育てられて来た平凡な若者を信じられないほど逞しい“日本男児”に鍛え上げる秘訣であり、将来幹部自衛官として必須のリーダーシップとフォロワーシップが見事に養成され、国家の中核を担う人材育成に欠かせない貴重な時間と道場になっている。繰り返して言うならば、四年間の学生生活は1学年進級する毎に“新兵”～“古兵”～“下士官”～“初級幹部”の様な自覚を持つ特異な日々である事が素晴らしい。

私を含め同期生は久々に小原台を再訪し、学生当時には意識した事が無かった戦後の日本で破壊され続けて絶滅が危惧される“大和魂”がここ小原台に深く根付いていて、素晴らしい後輩が続々と巣立ってゆく姿を目の当たりにして、胸の熱くなるのを覚えた。

我々13期生は、既に前期高齢者の仲間入りをした。しかし、小原台で“日本男児”へと鍛えられ“大和魂”を身に付けた我々は、米国の詩人サミュエル・ウルマンの詩「青春」のように死ぬ瞬間まで“*Youth is not a time of life; It is a state of mind;*”（青春とは、人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。）の気概を持ち続けたいと思う。

HCDは我々13期生にとって小原台での短い滞在であったが、この地を踏んだ瞬間から素晴らしい青春時代を過した日々が鮮明に蘇り、それが我々を今日の姿に導いてくれたと確信した。そして、一人一人の力は小さいが、皆で協力・結集して日本の平和と独立に貢献できた事に無上の喜びと感謝が交叉するとともに、改めて防衛大学の重要さと有り難さとを認識した。

「後輩諸君、情熱を持って生き、常に謙虚な姿勢で頑張るって欲しい！そしてまさかの時、日本民族の最後の砦として如何なる重圧にも耐えられる人材に育ってくれ！」との思いと願いを心に込めて小原台を後にした。



まちに恩返しをしたい

江口(旧姓 酒井) 正夫(18期・陸上)



1 60歳を過ぎて考える

私は宮城県多賀城市の新人議員として、9月11日で2年目に入ります。今はまちの復興と再生のため、そして人の心の復興のため、お役に立ちたいと思って働いています。人にはいろんな形で社会貢献をされてると思います。第二の人生期に入ると、自分の人生を振り返って考える時があります。40年近く家族のためと思って働いて来て、ふと自分は社会に何を還元してきたのだろうかと自問自答する時がありました。

2 東日本大震災発生

遡ること約1年前、あの恐怖と不安に押しつぶされそうになった東日本大震災が平成23年3月11日午後2時46分に物凄い地鳴り音とともに起きました。ちょうどその時、私は前日自宅近くに開いた後援会事務所の一室で、選挙資料作成のため一人でPC作業をしていました。突然の揺れは次第に大きくなり、周りの机や椅子は倒れ、窓のガラスは波を打ち、書類は散乱し、机の下で必死に脚を両手で持って、揺れの収まるのを待ちました。揺れは2~3分でしょうか、それとも5分ぐらいあったのでしょうか、このまま建物が潰れ、その下敷きになってしまうのだろうかと考えつつ、ようやく揺れが収まって、自宅の状況を確認しに事務所の2階から階段を下りて走りました。自宅にいた嫁と孫の安否を確認し、散乱した家の中の片づけをしていたところ、窓から外を見ると、道路上を大勢の人が蟻のように行列を組んで小走りに高台の方へ向っていたり、あるいは普段より多くの車がスピードを出して往来しているのに気がきました。

その人たちに「何かあったのですか」と声をかけると、「津波が来ますよ。避難した方がいいですよ。」と言われ、すぐさま嫁と孫を高台の指定避難所に行くように指示し、私はお隣の独居老人の家に駆けつけ、避難させようとしたのですが留守でした。後でわかったのですが、幸い隣町へ通院されていたとのことでした。そして、隣近所の人たちに、一軒一軒大声で「津波が来ます。今すぐ避難して下さい。」と大声で叫びながら走り回りました。その間30分ぐらいでしょうか。どのぐらいの時間かもわからないぐらい必死でした。それから避難所に向けて走り出し

た時には、私の後方200mまで津波の濁流が物凄い勢いで迫って来ていました。その後は、夕方から降りだした雪の中、消防団や自衛隊とともに逃げ遅れた住民の救助や避難所での作業、パニック状態に陥っている交通の整理にあたりました。結果的に、私の町内は津波によって約1.5~2.0mの浸水があり、自宅は床上60cmの浸水となって大規模半壊の被害を受け、家財道具は流され、車は2台水没し、電化製品は一切損壊し、水が引くまで4~5日かかり家の中は手の施しようがありませんでした。至る所で、地盤沈下や道路は凸凹、マンホールは隆起し、流されてきた車両やゴミ、ヘドロは大量。避難所での炊き出しはライフラインが破損し、水、米、食料はなく、被害を受けなかった家々から鍋釜、米を出してもらい、木くずを集め、2日間何とか避難者の最小限の食事を確保しました。食事は高齢者や子供を優先して配り、私たちは口にいれるものがなく、2日間をおにぎり2個で過ごしました。3日目にはようやく市からの、そしてボランティアからの救援物資が届くようになりました。多くの皆様からの物心両面のご支援には心より感謝しています。

3 まちへの恩返し

多賀城市では、まちの面積の1/3が津波で被災し、死者189名、行方不明1名、全壊1,731世帯、半壊3,589世帯の大きな被害を受け、沿岸部の某地区では90%以上の家屋が津波に流され、ゴーストタウン化してしまいました。がれきの山の広域処理も問題になっています。復旧・復興は10年計画で、徐々にではありますが前進しています。一方で、心に大きな痛みを受けた被災住民が、希望を持って前向きに生きる意欲を奮い起こす人間復興にはもう少し時間がかかるでしょう。コツコツと築き上げてきた大きな財産と家族を失い、住宅・事業再建の資金繰り、雇用の確保、健康の回復等そして何よりも将来への不安の払拭は大きな問題となっています。今、震災の教訓を風化させず、「ものづくりも大事。それよりもっと大事なものは人づくり、共に助け合う心。」の大切さを、改めて思い知らされました。これまでの地域コミュニティが崩壊し、新たなまちの環境への適応の難しさもありますが、一つ一つできることから、小さなことの積み上げから、問題解決に向かって、子供たちが将来のまちに希望と夢を持てるような、新たなまちづくりに立ち向かって行きたいと思います。まずは自助、次いで共助、最後に公助の心を育み、安心安全なまち、住みよいまちづくり、それが私に今課せられた、まちへの恩返しと思っています。

スローライフ(夢物語?)

古屋 泰(18期・陸上)



初めに

この欄ではいつも皆さんの活躍が紹介されて私も感心して拝読させてもらっていましたが、今回はそういった事には無縁な私に投稿のお話があり一度は辞退を伝えました。しかし普段の生活を紹介するだけで良いと言われ、拙文を投稿することとしました。そのつもりで読み飛ばして戴ければ幸いです

序章

北海道では珍しく9月に入っても30度を超す日が続いている。子供の頃は、お盆を過ぎれば泳げる日はほとんどなかった気がする。今年は6月も30度を超す真夏日が6日も続き、13年ぶりの記録だと新聞に載っていた。

暦はずでに秋、しかし現実には朝も暑さで目が覚める。もう7時かと思えばベットを離れテレビを見ると、何故か朝の連続ドラマが始まっている。退職してから起きる時間がどんどん遅くなっている。妻からも早く寝て規則正しい生活をと言われていたが、孫の写真のプリントやらフォトムービーを作っているといつの間にか時計は1時・2時…。

これではいけないと思いつつ日々繰り返してある。

朝食を済ませ我が家の小さな庭の花摘みと水やり、そして疲れたところで庭でのコーヒータイムを二人で楽しむ。午後は仕事(非常勤で電話相談がなければ自分で調整した時間に部隊を訪問)明日は仕事もないので十勝千年の森にでも行こうかな……。

退職後は現職時代と違い時間に追われることもなく、都会の便利さ・豊かさはないが、地元で本当にのんびりした人生を満喫している。自分の子供が生まれた頃を振り返れば、朝は子供たちが起きる前に出勤し帰宅すればすでに寝ている生活が続き、子育てはほぼ妻に任せきりであった。休日のある日、長男を抱こうとして泣かれた思い出がある。あれから30年経ち、平日に孫たちが庭で砂遊びをするのを眺めたり動物園や買い物に一緒に出かけたりする度にふと考える。幼い子供たちの輝く笑顔や甲高い笑い声、それらはお金では買えない贅沢なのかもしれない。こんな経験は自分の子供たちとはできなかったな。そしてフルタイムで働いていたら、今度もまたこういった機会はなかったのだと今の幸せを噛みしめている。とはいうものの、経済的に余裕があるわけではない。

フルタイムで働く近所の同期O君は注文住宅の豪華な一軒家に住み、自分用の外車を乗り回し、現役時代並に仕事をこなしている。忙しくて庭の草を取る暇もないとぼやいていた。(それでも土日のゴルフは欠かさないそうだ)

それに比べ我家では、20年以上前に購入した建て売り住宅に大きなりフォームもせずに住んでいる。退職と同時に2台所有していた車を1台にしたり、海外旅行等お金のかかることは自粛する節約生活をしている。

妻にも一度くらい海外旅行がしたいと言われ、中期計画は立ててはいるのだが実現は?。娘からは将来の生活は大丈夫なのかと心配されている。元々は地元に戻ってこういう生活をしようとは思っていなかったのだが……。

1章 仕事

話は9年ほど前に遡る。定年まで残り3年を切った平成15年3月、やっと最終勤務地(過去に内示取り消しを含め3回実現しなかった因縁の場所)に赴任した。札幌は、定年後の就職もまだ道内の他の地域より有利で趣味の活動にも適していた。娘も札幌での仕事にも慣れ、家族で退職後の新居等について話す機会が増えて来た7月に異動内示があった。結局、喜びもつかの間、4ヶ月で札幌を後にすることとなった。

定年前までの2年の予定で帯広勤務が始まった。そして、これが最初で最後の単身赴任でもあった。(翌年の3月には解消し、わずか8ヶ月間であった)

父の法事以来ご無沙汰していた実家にも顔を出す様になった。義姉と二人暮らしの母も随分と年老いた様に感じられた。義姉には道外勤務の間、母の面倒を任せきりだったが、現状を見てからは少しは自分もやらないといけないと思い始めた。

そして2年後、結局8月の異動はなく、付配置の期間を短縮し年内は現職を継続した。付配置後の異動は辞退して退職後は帯広に永住することにした。札幌での好条件での就職斡旋も辞退した。帯広では希望する条件の就職ができず、半年ほど就職浪人生活を送る。この間、母の面倒は義姉・私たち夫婦・姪夫婦で見ようになっていた。

そんな折り、自衛隊OBの組織であるネット99(出張カウンセリング+相談業務)から声をかけてもらい「自分の経験を生かして現職の人たちの悩みを聞いたり、若干なりのアドバイスで職場への恩返しもできるし、ある程度自由になる時間も持てる」と思い二つ返事をお願いした。今も自宅勤務を主体に部隊訪問も行なう相談業務を続けている。義姉からの電話呼び出しにも対応でき、母親と出かける時間も持て親孝行のまねごとでもできたように思う。

話は脱線しますが、部隊訪問の際に感じたことを二つほど紹介します。

一つ目は指揮官への挨拶回りで「中隊長は良く部下を掌握しているので相談に行く者はいないだろうが、あなたも仕事だろうから回って良いよ」というタイプの人と「中隊長は部下の掌握に努めているが、隊員からすれば上司には相談しにくい事もあると思うので各中隊を回って話を聞いてやって下さい」というタイプの人がいる。前述の部隊では、中隊長から服務指導で部隊長に報告していない事案で相談を受けた事があります。ただ、隊員

からは相談を受けることはありませんでした。先任上級曹長等にカウンセリングの活用を話しても、反応は鈍い印象を受けました。地道なPRは重要ですが、指揮官の人となり部隊に及ぼす影響は大であることを、今更ながら感じさせられました。

二つ目は中隊長等の部屋のドアが通常閉じられている(会議や来客中は除く)指揮官に挨拶に行った時に、部屋の中に入っての話はほとんどなく立ち話で終わることが多いことです。前中隊長からの依頼で相談を受けた場合でも、隊員のその後についての情報提供等連携の意志が感じられません。(相談内容は守秘義務があり、本人の了解のない限り指揮官にも話しません)では、ドアの開いている指揮官の場合はどうか?皆さんの想像通りです。どちらについても昔から効用が論議されていますが、相談員としては後者の方が嬉しいです。

本題に戻る前に、昨年の東日本大震災後にネット99帯広支部への相談件数が減少していることについて、私見を紹介します。今のところ原因は不明で推測の域を出ませんが、一つには未だかつてない大変な状況で長期間に渡る災害派遣・復興支援で自衛官として貢献できたという充実感・高揚感によるものではないか、二つ目としては「大切な家族や友人・思い出の詰まった家や家財全てを失い、更に生活の糧となる仕事も失い地元に住むことさえできなくなった人々がいる。それでも懸命に生きている」被災地の現状を観て、自分の悩みなんて悩みに入らないと思い相談を控えていることによるものではないかと思っています。

いずれにしてもネット99の本部長(同期のHくん)からは、道央地区の相談件数は多いのに道東地区は少ないと指導を受けている。

2章 趣味

その1 テニス

40才を過ぎて習い始めたテニス、当初のメタボ解消から競技会での活躍と目標変換。テニススクール内の大会では優勝も経験し、平成20年6月、退職後初めて防大OBのテニス大会にI君の仲介でメンバーに入れてもらい、わざわざ北海道から参加した。(本人は助っ人のつもりだった)しかし、暑さにやられ力を発揮できず、結局は足を引っ張る結果になってしまった。

言い訳をさせてもらえば、当時、帯広では連日海霧が進入し最高気温13度ほどで朝夕はストーブを焚いていたのに、横須賀では30度近くとなり北海道で言えば春から一挙に真夏という、私にとっては過酷なコンディションであった。

当日はコートサイドで応援する同期を尻目に、自分のプレーする時以外は木陰に避難して体力を温存、午前中はそれでも何とかペアの頑張りで2勝したものの、肝心の決勝では更に動きが悪くチャンスボールも決められず、我ペアは同期の応援むなしく敗れてしまった。そして同

期の初優勝を逃してしまった。

この反省から、朝練を昼間の練習(熟年クラブ)主体に変更し、昨年の十勝団体リーグ(地元のテニス大会で男子は約40チームが参加)では、最上位のスーパーリーグに出場できるまでになった。しかしまだ防大OBテニス大会に復帰する勇気はない。そして今年、錦織選手(プロテニスプレーヤー)が使っているワイパースイングを習得すべくフォームを改造中である。

その2 庭造り

退職後、家が狭いのでせめて庭でティータイムを楽しめるようにと妻と二人で芝を剥ぎ、ブロックを敷きレンガでアプローチを作りイングリッシュガーデン風に仕上げようと試行錯誤を重ね、2年をかけて何とかイメージに近いシンプルな庭が完成した。しかし、孫ができいつの間にか、砂場、水場が増え、孫が遊べる庭に変貌してしまった。(娘からは狭い庭なのにごちゃごちゃし過ぎと言われていた)

そして、60才を過ぎ日時計の花壇やバラの花壇の手入れが大変でオブジェ置き場に変更、更に芝の草刈りも億劫になり一部を人工芝に張り替え・・・その内全面人工芝になるかも?



庭も綺麗に維持するのが重要ではなく、その時その時の自分たちが一番楽しめることが夫婦にとっての理想の姿かなと思っている。娘に何と言われようと自分たちの好みの庭造りを続けるつもりで、最終的にはなくなっても良いのかもと思っている。

その3 写真(フォトムービー作り)

小さい頃から写真が好きで、最近は撮りためた写真に音楽を付けてテレビで鑑賞するのを楽しんでいる。(音楽付きスライドショーの様なもの)

中学の同窓会では、昔のアルバムをデジタル化しフォトムービーとして上映し好評を博した。知人の結婚式や創隊記念日のフォトムービーも、それなりに喜んでもらっている。しかし我家では最初こそ評判が良かったが、最近は飽きられてきている。

その4 その他(挑戦)

還暦の記念に地元誌で洋服のモデルに挑戦してみた。閉店後のお店でライトを煌々と照らした中で、道行く人の好奇の目を気にしながら3時間以上の撮影に奮闘。「もっと笑って、こっちを向いて!」と言われてもなかなか上手く反応できない。間違いだったかと思いつつも、

着替えるたびにスタイリストが髪型も変えてくれてちょっぴりモデル気分を味わう。自分では滅多に選ばない様な服装で良い記念になったと思う。

掲載された雑誌はいまだに大事に保管している。



3章 健康

現職時代から血圧が高く薬を服用していたが、それ以外は正常範囲だった。退職後、徐々に尿酸値・悪玉コレステロール値が高くなり服用する薬の量が増えた。

それでも年の割には健康と思っていたが、今年の7月に咳が止まらなくなり喘息といわれびっくりしたのも束の間、今度は大腸癌検診で要精密検査の通知が届く。今まで一度も再検などなく間違いと思いつつも取り敢えず病院で検査を受けた。すぐ帰るつもりだったが、内視鏡によるポリープ切除で入院する羽目になった。切除したポリープの検査結果は9月になると言われた。

退院後に喘息と診断された咳が止まらないため、呼吸器科で再度検査を受けたところ「レントゲンで肺に白い影がある。CT検査が必用」との診断を受ける。更にペット（全身のがん検査）も予約することとした。

大丈夫と思いつつも、また入院する羽目になる前にやりたいことはやっておいた方が良くと思い急遽、以前から乗ってみたいと思っていた車を購入し、妻と娘家族で近くのナイタイ高原に2台でドライブに出かけた。私の助手席には孫が座っている。青空を見上げながら「ゾウさんの様な雲が浮かんでる。あっちにもある～」とはしゃぐ声、そして照りつける太陽の日差しを浴びながらも流れる風が心地良い。心の中でまた一つ夢が叶えられたとつぶやいた。



終わりに

皆さんの中にも「自分は定期検診なんか受けなかったって大丈夫、今まで病気なんかしたことなんてなかったんだから」と思われている方もいるのではないのでしょうか。でも、発見が遅れ「突然余命〇〇」と言われた時、「多少の心残りはあるが、素晴らしい思い出が沢山あって我が人生に悔いなし！」と心から思える人は、どれくらいいるでしょう？ いずれにしても、健康でそれぞれの人生を楽しみたいものですね。

私の場合は、幸いにして大腸癌検査及び肺がん検査の結果は両方とも良性でした。もう少し長生きをして、若干の貢献と楽しい思い出を増やしたいと思っています。

十勝には、十勝千年の森・十勝ヒルズ・柴築ガーデン・中札内美術村・花畑牧場等書ききれないほどのガーデンがあります。またばんえい競馬やモール温泉も有り、のんびり観光を楽しむには良い所だと思います。十勝晴れの下で、トウモロコシやメロンを味わうのも乙なものです。思い出作りに十勝を紹介させてもらい結びとします。

デジタルオーディオの可能性

東郷 行紀(18期・海上)



私は子供の頃から音楽が好きでした。それは亡父がオーディオ（当時は電蓄：電気蓄音機と言っていました）が好きで、レコードプレーヤーやアンプ、大きなスピーカーが洋間の正面にデンと置いてあり、物心つく頃から、いつもクラシックが流れていたことが、音楽好きになった要因の一つであることは間違いありません。

防大の学生時代は、8人部屋の自習室に小さなステレオを置いて、それをヘッドホンで楽しんでいました。1970年代はカセットテープ全盛期で、防大では主としてカセットを聴いていました。たまに自宅に帰ると、レコードやオープンリールテープの音を聴き、カセットとの音質の差を感じました。従って、いつか良いオーディオセットを持つことが夢の一つでもありました。

1980年代初頭にSONYのウォークマンが大ヒットし、勤務先の艦の中でも容易に音楽を楽しめるようになりました。しかし転勤が多く、狭い官舎生活では、本格的なオーディオを揃えることは依然遠い夢でした。その後、海幕の課長時代に自宅を建て、そこが多分ついでに住処となるであろうことから、財布の許す範囲で、ある程度本格的なオーディオを導入しました。

アナログオーディオの場合、良い音を追えば、それなりの出費は覚悟しなければなりません。例えばレコー

ドプレーヤーは、ターンテーブルを如何に一定回転で正確に回すかが重要です。そのためにはクォーツ制御のダイレクトドライブモーターと、半端でない重量のターンテーブルが必要です。また高級レコードプレーヤーにはレコードの穴が真ん中に空いているかどうかチェックし、ずれを補正するものもあります。何故ならせっかく正確な回転数でターンテーブルを回しても、レコードの中心がずれていたら、再生音に歪みが出るからです。このような機能を持ったターンテーブルは数十万円しました。レコード針を含むカートリッジもびんきりで、高級品は昇圧トランス等を含め数十万円もしました。アンプも高級品は数百万円するものはざらにあります。これに安定化電源だの高級ケーブル等を揃えたら、高級車1台は軽く買えそうな価格になります。ちなみにビル・ゲーツ氏保有のオーディオシステムは80万ドルだとの噂です。

ところが、オーディオの世界にもデジタル化の波が押し寄せ、TVや家電と同様、デジタル革命と言える激変が起こりつつあります。デジタル化により、今まででは考えられぬような価格で良い音を鳴らすことが出来る時代になったのです。

本稿では、昔だったら高値の華であったかもしれない高級オーディオをはるかに凌ぐ安価なデジタルオーディオの可能性について、今までアナログに多くの散財をした懺悔とともに述べてみたいと思います。

本論に入る前に、デジタル音源の主流であるCDについて少し振り返ってみましょう。CDは1982年に誕生しました。発売当初はアナログ正統派から言わせれば、亜流であり肝心な音もアナログには及ばないものでした。当時のCDは、DAC (Digital Analog Converter) によりアナログ変換をし、それをアナログアンプで増幅しスピーカーを鳴らしていたのです。謂わば音源だけがデジタルで、他はアナログを使っていました。またDACも今とは違い、一言で言えば未熟でした。従ってアナログ派のオーディオマニアは、CDを蔑視していたのです。しかし何百万もかけたアナログシステムならCDに勝っていたかもしれませんが、10万円ほどの予算ならアナログよりCDの方が圧倒的に良い音で鳴ったことも事実で、CDは瞬く間に普及し、アナログの代表格であるレコードはすっかり駆逐されてしまいました。

その後、技術が進み、現在ではCDがどんな高級なアナログシステムをも凌駕したと言えます。同じ音源の曲を、レコードとCDで聴き比べてみると、最新のデジタル機器を使えば、容易にCDに軍配が上がります。一方でレコードのピロードのような柔らかな音は、いつまで聴いても疲れな心地よさがあり、多少S/N比が悪いとか、レコード特有のパチパチという雑音や取り扱いが面倒等のハンディが有っても、筆者を含め未だにファンが多いのは事実です。

当初は評価の低かったCD等デジタルオーディオが、アナログを凌ぐようになったのは、大きく分けて3つ理由があります。

一つは、デジタル転送等CDの再生技術の進歩です。

二つ目は、高性能デジタルアンプの出現です。

最後は、デジタル時代に相応しい新しい音響理論のスピーカーの出現です。

最初は、デジタル転送についてです。少し専門的にありますが、CDの規格は16ビットの階調で、サンプリングレートは44.1KHzです。当初この程度の階調とレートでは、広範囲な周波数領域等を全てカバーすることはできず、アナログには及ばないとされてきました。ところが最近では、この規格でも十分アナログを凌ぐことが分かってきました。それは、16ビット、44.1KHzの情報量を、余すことなく引き出せるようになったことが大きいのです。

デジタル転送は、残念ながら必ずビット落ちが発生します。データ通信の場合は、ビット落ちを常にチェックし、発生した場合にはその部分を再送し、完全なデータを送るようにしています。しかし少し前までのデジタルオーディオでは、ビット落ちは補正されませんでした。オーディオはリアルタイムシステムですから、当時の技術ではリアルタイムにビット落ちを補正することは難しかったかもしれません。しかしビット落ちを補正するだけで音は激変しました。CDの情報を全部引き出せるようになって初めて、CDの実力が分かるようになったのです。

余談ですが、CDでは情報量が足りないということで、1999年からCDをはるかに上回る新たな規格であるSACD (Super Audio CD) が発売されました。筆者もSACDを聴いた当初は、音が良いというか原音に近いと思いましたが、CDの再生技術が進歩した現在では、そう大きな差は感じられません。

さらに、最近ではオーバー (アップ) サンプリングと言って、44.1KHzを96KHz程度、中には192KHzにするものもあります。当然サンプリングレートが上がれば、量子化誤差は減ります。ただしCDは元々44.1KHzですから、いかにオーバーサンプリングしようが、量子化誤差は変わらないはずですが、デジタルアンプを使用した場合、この差は確実にあるようです。

次にデジタルアンプです。デジタルアンプはデジタルデータをそのまま増幅し、出力の際、ローパスフィルターによりオーディオ周波数をデジタルで取り出すものです。

アナログアンプではオーディオ周波数を歪み無く増幅しなければならぬため、歪み補正のための複雑な回路と、それなりの電源が必要です。S/N比やダンピングファクターを上げる必要もあります。そこまでしても、全く歪みのない理想的な増幅は不可能です。

一方でデジタルアンプは1か0かのデジタル信号をそのまま増幅します。歪みがあろうがなかろうがデジタル増

幅には関係有りません。そして出力の際に、ローパスフィルターで可聴域外の高周波をカットするのです。いくら高周波をカットしても出力はデジタルですが、不思議なことにこれをスピーカーで鳴らせば、アナログと全く同じように聞こえます。これがデジタルアンプの仕組みです。デジタルアンプの場合、サンプリングレートが上がると、音がやわらかく聞こえるようになります。最初の頃のデジタルアンプは、やたら尖った音で、解像度が良いというか輪郭がはっきりし過ぎ、長い時間を聞くと疲れる音でした。またスイッチング回路のノイズもありました。しかし最近のデジタルアンプはオーバーサンプリングの効果も相まって、角が取れ大変聴きやすい音になりつつあります。デジタルアンプはデジタル信号をただ増幅するだけのものですから、1チップで済む上、効率が極めて良く熱を持ちませんから自然冷却で十分です。また大きなトランスやコンデンサー等を用いた立派な電源も必要有りません。よって極めて安価なのが魅力です。

筆者は1万円から4万円程度の3台のデジタルアンプを使用していますが、その差を筆者の耳では聞き分けられません。このおかげで、以前は最高だと思っていた、マッキントッシュやマークレビンソンのアンプはお蔵入りしました。ちなみにマークレビンソンの新品価格はデジタルアンプを何十台も買えるものです。これこそがデジタル革命なのでしょう。

ちなみに、デジタルアンプの中にはADコンバーターを持つものがあり、アナログ入力をデジタル化して増幅できますので、レコードも聴けます。

スピーカーは過去何十年もほとんど革新的な進化はありませんでしたが、最近新しい音響理論のスピーカーが出現しました。それは、日本人の技術者が開発したタイムドメインスピーカーというものです。従来のスピーカーは低音から高音までを一つのスピーカーで再生することは難しく、複数のスピーカーを組み合わせしていました。ところがタイムドメインスピーカーは、全周波数域を小口径スピーカー1つでカバーします。タイムドメイン理論の詳しい説明は省略しますが、簡単に言えば、音はその立ち上がりが極めて重要で、立ち上がりをできるだけ忠実に再現すれば原音と同様に聞こえるというものです。そのためには、小口径スピーカーの方が時間的遅れが無く有利です。さらにエッジの立ったデジタルアンプと組み合わせることで、最も良い結果を生み出します。

デジタルアンプとタイムドメインスピーカーの音は、びっくりするほどリアリティーに溢れ、不思議なことに部屋の隅々まで音が届きます。ただし、映画館やロックコンサートのような、腹に響くような低音は期待できません。あれはアコースティックなサウンドでは無く、大口径スピーカーと大出力アンプにより人工的に作った音だからです。

筆者のオーディオの音の基準は、コンサートホールにおけるオーケストラです。ですから、時々コンサートに出かけ、コンサートを楽しむと同時に、自分のシステムの音と、どこが違うのかを考えます。この結果、行き着いたのが、デジタルアンプとタイムドメインスピーカーの組み合わせです。過去のどんなシステムより、良い音がすると感じています。

最近車の中にも、デジタルアンプとタイムドメインスピーカーを設置し、iPodで鳴らして楽しんでいます。

それでは最後に、平成24年10月時点でのお勧め器材を紹介したいと思います。以下はあくまで筆者の主観と経験に基づいたものであることをお断りします。よって他にも良い物があることを否定するものではありません。

まず、最も安価で簡単なシステムは、タイムドメインスピーカーとiPodもしくはウォークマンの組み合わせです。小型のタイムドメインスピーカーは、ライトとミニがありますが、ライトは握り拳ほどの大きさで、ミニはそれを一回り大きくしたサイズです。よって場所を選びませんし、天井にも取り付けが可能です。これらはデジタルアンプを内蔵し、定価はいずれも18,000円です。ですから、ライトやミニにiPodやウォークマンをつなぐだけで、結構本格的なサウンドが楽しめます。これらは家電量販店で入手できます。

友人にタイムドメインライトを勧め、TVにつないだところ、小音量でも部屋の隅々に音が届き、はっきり聞こえるようになったと喜んでもらえました。さらにPCの中にたくさんの音楽ファイルを入れ、これをタイムドメインライトで楽しんでもらっています。

もう少し投資できるのなら、スピーカーはタイムドメインのライセンス生産をしている富士通テンTD307Mk2A(定価1本:18,900円)が、デジタルアンプは、(株)ラステーム・システムズのRSDA302P(定価:18,945円)がお勧めです。どちらもあまり馴染みの無いメーカーですが、音は間違いなく一級です。

スピーカーのTD307Mk2Aは握り拳3つ4つ程の大きさで、壁にも天井にも取り付けられますから、場所を選びません。このスピーカーは同シリーズ中、最も小口径スピーカーであり安価ですが、タイムドメインの特徴を良く現したスピーカーであると言えます。このスピーカーはアマゾン等通販の他、ヨドバシカメラでも扱っています。

デジタルアンプのRSDA302Pは、ADコンバーターを内蔵していますから、デジタル、アナログどちらにも対応し、小型の弁当箱ほどの大きさです。購入はアマゾン等通販で可能です。

従来のイメージのステレオなら、CDプレーヤーは必須でしたが、残念ながらお勧めのCDプレーヤーはありません。その代わりにPCを使えば十分です。PCがマックなら、オーディオ出力（光デジタル）をそのままデジタルアンプにつないで問題ありません。

しかしWindowsマシンの場合は、オーディオ出力はマックに及ばないと、ノイズが乗る場合もあるため、iPodやウォークマンにオーディオファイルを移し、その出力をデジタルアンプにつなぐ方が良い音がします。iPodのイヤホン端子からはアナログ出力しか取り出せませんが、デジタル出力を直接取り出すアクセサリーも売っています。

CDプレーヤーを買うお金でマックは十分買えますので、本格的な音をお望みの方はマックを一度試されることをお勧めします。

なお、前述のシステムならば、CDの音をMP3等で圧縮すると音質の劣化が明確に分かりますから、良い音を追求するなら圧縮はせず、原音で聴いて下さい。

腹に響くような低音をお望みの方は、スーパーウーハーを加えられると良いでしょう。残念ながら、私はスーパーウーハーを保有していないのでお勧めはありませんが、3万円程度で、そこそこの物が買えるはずですよ。

スピーカーケーブル等のアクセサリーですが、高価な物は必要ありませんし、その差は良く分かりません。ちなみに筆者のスピーカーケーブルは普通の電線です。（以前は高価な物を使用していた懺悔を込めて書いています。）

これで、本当に何百万もするアナログシステムを凌ぐ音がするかどうかは、好みの問題もあり難しいところですが、少なくとも解像度や音の定位はアナログより数段上だとはっきり言えます。それにタイムドメインスピーカーの場合、最適リスニングポジションだの、スピーカーのセッティング等を気にして頂く必要は全くありません。部屋のどこでも心地よい音が聴けます。またそんなにボリュームを上げなくとも、それぞれの楽器が奏でる音の隅々まで良く聞こえるし、ボーカルの場合は、歌手の息使いまではっきり聞き取れます。

安価なデジタルシステムとタイムドメインスピーカーで最高に良い音を手にされ、癒されてみませんか？

一数学教師の独り言

小宮 克美 (18期・航空)



航空自衛隊を定年退職して早や6年が経過しました。現在私は、横浜市戸塚区にある「横浜薬科大学」の専任講師として働いています。

本学は横浜市戸塚区俣野町の「旧横浜ドリムランド」跡地に建設され、2006年3月に開講された6年制の薬学専門の単科大学です。定員は1学年360名で、現在約2,000名の学生がいます。今年3月本学最初の卒業生を出しました。

ここで私は多くの薬学専門の教師陣に交じって、1年生の必修科目である「基礎数学」と「基礎物理学」の教育を担当しています。講義コマ数は全部で週6コマですが、学生に対する課外指導、1年生の早期体験実習や5年生の実務実習に対する学外指導、定期試験や入学試験等の各種試験監督、オープンキャンパス・入試説明会、高校訪問等、仕事のメニューは豊富です。

私が本学に着任したのは2008年3月のことです。それまでは東京渋谷駅前にある「東京工業専門学校」で航空工学科の学生に対し「基礎数学」や「流体力学」を教えていました。当校が本学の姉妹校であったことと、私にはからずも「工学博士」の資格を持っていたことが幸いして、本学での講師採用が決まりました。

私が定年後の再就職先として教育職を選んだのは全くの偶然です。安牌の「防衛産業」に陰りが見え始め、適当な需要がなく、防衛援護室からは「保険業種」を勧められました。しかし、知識も自信も全くないので断りました。そんな時、ふっと思いついたのが教育職です。「専門学校でも探して下さい。数学くらいなら教える自信があります。」と援護室の担当者をお願いしたところ、数日して「東京工業専門学校」を紹介されました。給与等の処遇面では、「防衛産業」のそれと比べて、かなり低いものでしたが、自衛官時代も趣味として学び続けた「数学」を教えることに魅力を感じ即断しました。

今、大学の教壇にたって、好きなことを楽しみながら教えることのできる幸せを日々かみしめています。これも若い時に東工大大学院で5年間の研究時代を経験した結果だと思えます。後輩の諸君も特に働き盛りの時、自衛官業務の他に定年後を見据えた自己投資をお勧めします。「少ニシテ学ベバ、則チ壮ニシテ為スアリ。壮ニシテ学ベバ、則チ老イテ朽チズ。老ニシテ学ベバ、則チ死シテ朽チズ。」

江戸後期の儒学者佐藤一斎が残した言葉です。

これは私が高校2年の時、漢文の担任から教えてもらった記憶があります。言葉の意味は平明ですが、実行す

るのはなかなか困難です。

なぜ、急にこの言葉を紹介したかという、定年後の再就職先を考えると、「壮ニシテ学ベバ、則チ老イテ朽チズ」というフレーズが特に大切だと思うからです。壮年期は誰もが最も働き盛りで仕事も充実し、真剣に仕事についての勉強をし、新しい情報もどんどん入ってきます。そうした情報を吸収すればするほど「学んでいる」と思い込んでしまいます。そして定年を迎え、再就職について考えると、今までの知識・経験がほとんど役に立たないことに気付くのです。医師、弁護士、公認会計士等、特別な国家資格をもっている人はまだしも、普通の人が仕事で得た知識経験をそのまま新たな職場で活用できることなど、めったにありません。自衛官は特にそうです。また、にわか勉強で定年後も通用するような国家資格を得ることは極めて困難です。

定年後も「老イテ朽チナイ」ためには、壮年期のとき何らかの形で、仕事以外の勉強を日々積み重ねておくことが大切です。この小さな積み重ねが、定年と同時に花開くことになると思います。「壮ニシテ学ベバ……」のフレーズはこのことを言っていると思います。

話が十分長くなりました。この原稿を書いている今、大学は夏休みに入ったばかりです。薬科大学の特性上、夏休み返上で3,4年生は薬学演習の受講、5年生は国家試験模擬試験の受験、6年生は来年の国家試験に向けた受験勉強の追いこみに励んでいます。私は、来るべき後期授業のレッスンプランの検討と、2013年度の入試問題の作成に余念がありません。

本学も6年間の試行期間が終わり、文科省による大学認可の最終査定が間もなく決めます。私も今年で63歳、本学の定年規定によれば後1,2年は働けるはずですが、そろそろ第3の人生についても考え始めねばなりません。別に「死シテ朽チズ」までは望みませんが、少なくとも「老イテ学ブ」ことはこれからも続けたいと思います。後輩諸君は自分なりにできる範囲の大望をもって、健康に留意し、それぞれの任務で活躍されることをお祈りいたします。そのとき、拙文で紹介した佐藤一斎の言葉も時々思い起こしていただければ幸いです。有難うございました。



強く、たくましく



一般幹部候補生 陸曹長
中林 由貴

今年3月に防衛大学校を卒業し、久留米の幹部候補生学校に着校した4月から早くも半年が過ぎました。入校当初は不慣れなことが多く、戸惑う面も多かった生活も、今では演習や高良山登山走といった節目となる行事を終え、残すは総合訓練等最後の山場を迎える時期に入ってきました。今思い起こしてみるとこの幹部候補生学校で過ごしてきた日々はあっという間で、あと約2ヶ月で卒業を迎えるという実感もなかなか湧きませんが、そんな中でも防衛大学校卒業時から現在に至るまで多く考えさせられる機会がありました。今回は防衛大学校同窓会の皆様、現役防衛大学校の学生、特に防衛大学校の女子学生も読まれるとのことですので、幹部候補生学校生活の紹介も交えて女性自衛官という視点から後輩に伝えたいことを述べていこうと思います。

陸上自衛隊の幹部候補生学校においては初級幹部として必要な資質や技能を修得するため、教育・訓練が行われています。その内容は戦術、戦史から戦闘及び戦技訓練に至る面まで思考過程から心身を鍛えるまで様々です。では、この教育・訓練の中で特に重視されていることはなんなのでしょうか。幹部候補生学校では6大資質というのが掲げられており、使命感、責任感、判断力、実行力、品性、体力・気力が挙げられています。このような資質は生活から実員指揮にいたるまで様々な場面で試されます。部隊経験のない私たちに今の時期に教育される意義はこのような資質を涵養するためであると思います。幹部自衛官としての基礎はまさに資質の涵養であるといえ、この資質の向上が幹部候補生学校で一番重要視されています。このような環境で生活していく中で一人の幹部候補生として、そして女性候補生として感じることは多くあります。防衛大学校の女子学生が任官するのにあたっての不安事項があると思いますが、私の経験から次の2点について述べていこうと思います。まず、資質についてです。先に述べたように幹部候補生学校で求められていることは資質の向上です。行進訓練や防御訓練など男女の体力的な差を感じることもあるかもしれませんが、試されているのは資質です。厳しい訓練の時にも人に気遣うことが

でき、仲間と励ましあうこと、また、平素から区隊のために係の仕事をごなし、自分の資質を高めていくことが大切です。訓練に関しても厳しい課題もありますが、防衛大学校の生活をこなし教育訓練をきちんと受けていれば必ず達成することができます。区隊全員の前に立って区隊を指揮することも多くなります。また、女性候補生の意見を受け入れてくれる機会も増えています。幹部候補生学校は男女問わず思い切り自分の能力を発揮することができる場であるといえるでしょう。男女問わず不安を抱えている学生は多くいるかもしれませんが、自信をもって着校してください。次に、女性自衛官として組織に貢献するという事です。将来、多様化する事態に柔軟に対応することが必要とされる幹部自衛官として、日ごろから柔軟な思考を養っていくことは大切です。これは、幹部候補生学校における教育においても、男女間で意見を交わすことで養うことができるともいえるでしょう。男女では清掃ひとつをとっていても着眼が異なることにより、区隊への貢献の仕方も変わります。防衛大学校の時よりも求められている資質がより高まるため、男女で協力し能力を補完しあう必要性も高まります。そして女性候補生として、女性自衛官として組織に貢献していくうえで、女性ならではの統率を確立していく必要があると強く感じました。男女問わず、多くの意見を交わしてください。そして、たくさんの柔軟性ある思考を養ってください。

最後になりますが、幹部候補生学校で教育・訓練を受けていく中で、防御訓練や行進訓練など体力的に厳しいと感じることも多くありました。男性候補生にかなわないと思うことも多く、あきらめたくなることもありましたが、でも、そんな時でもやはり助けてくれるのは一緒にいてくれる同期の候補生であり、最後まで手を差し伸べてくれるのも同期の候補生です。今近くにいる防衛大学校での同期を大切に、思いやりをもって接してください。また、私には後に続く女性の後輩のために、どうしても達成したい野望があり、それもまた、今のモチベーションにつながっています。それはBU女性幹部自衛官の普通科部隊への配属を将来実現することです。現在、I女性幹部の方は少数ですが普通科連隊に配属されています。これをBU女性幹部でも達成し、より女性自衛官が組織に貢献できるような環境を作っていきたいです。

防衛大学校での生活も、4年生は残り100日を切った頃だと思っています。目の前のことに思いっきり取り組んでいってください。そして防衛大学校を卒業したことを誇りに、自信を持ってそれぞれの幹部候補生学校に着校してください。みなさんは素晴らしい資質を持っています。

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

防大56期生に聞く



一般幹部候補生 陸曹長
森 克仁

防大56期生として今年の3月に卒業し、一般幹部候補生BU課程93期生としてここ久留米の前川原駐屯地に着校して半年が過ぎました。着校日の朝、不安で逃げ出したくなる自分を制しながら、幹部候補生学校の看板が立てられた衛門を前にしたとき、心臓のドキドキはピークに達していたと思います。しかし、いざ門を過ぎてみると、その不安は徐々に引いていき、代わりにここでしっかりがんばっていこうという決心のようなものが湧いてきました。環境が新しくなっても、全力でやることには変わらない。今まで自衛隊生活で学んだことのすべてを發揮し、より多くのことを学び、「すばらしい初級幹部になってやる」という風に段々と気持ちが切り替わっていきました。それから半年、時間の過ぎる感覚を忘れるほどの幹部候補生学校の生活も終わりが近づいてきました。我々93期BU課程が幹部候補生学校を卒業し、部隊へ行くまで残すところ約2ヶ月となりました。不安が無いわけではありません。果たして未熟な自分が部隊で初級幹部としてまともに勤務できるのか、職種と勤務地についてなど、間違いなく全員が持っているような不安があります。けれども、今は目の前にあることを一つずつ確実にやっていこうと思います。この「小原台だより」は防大同窓会の諸先輩方や現役の防大生が読むということですので、経験や知識が未熟な私としては、現役の防大生に対して伝えたいことを述べていきたいと思っています。

防大4年間で得られたと実感できたものの一つに、先を見るも物差があげられます。この物差は、1学年時や2学年時のカッター訓練といった慌しい環境の中で身につけたものです。この物差のお蔭で、幹候校入校後の環境下でも、次に何をすればいいか、優先順位は何かといったことを自然と考えて行動することができました。

次に防大のときにやっておけば良かったことですが、これは数え切れないくらいあります。まずは、積極性を培うことです。防大の時は、積極的でも消極的でも結果に差が少なく、積極的になると面倒になるからやらないという考えを持ったこともありました。ここでは、逆に積極性が求められます。人前で話をしたり、意見をまとめながら発表するというような機会が沢山与えられます。失敗を恐れる余り、授業中やゼミの時に右へならえをして、自分の意見を言えない人がいると思いますが、ここでは自らの積極的な態度から学ぶものが非常に沢山あり

ます。もう一つは、暗記力を向上することです。防大の忙しさの中では、一夜漬けの知識が豊富であり、漠然としか覚えていないことが沢山ありました。しかし、小隊長の命令下達、地点指示などでは、誰が助けてくれるわけでもなく、目的を達成するための要領を自ら考えなければなりません。防衛学や訓練関係の知識はなんとなく覚えているだけでは、何度も現場でいちいち教範を開くことになってしまいます。

これから入校する諸君も不安でいっぱいだと思います。決して幹部候補生学校は楽ではありません。しかし、自ら飛び込んでいくことで非常にたくさんの事を得ることができます。不安をなぎ払い、幹部自衛官への一步を踏み出してください。一足先に部隊で待っています。

防大56期生に聞く



一般幹部候補生 陸曹長
吉牟田 あずみ

幹部候補生学校に入校してもうすぐ6ヶ月、卒業まで残すところ後2ヶ月となろうとしています。入校当初はまるで防衛大学校1学年時のような慌ただしい生活に辟易することもありましたが、今では同期とともに協力し、時には仲間として、時にはライバルとして、切磋琢磨しながら、より専門的な学科と訓練に取り組んでいます。生活においては、防大生のときよりも、私たちの手で成り立っており、自分たちの幹候校生活が豊かなものとなるか、意味のないものとなるか、それは良くも悪くも私たち次第であり、またそれが楽しくも感じられます。

1年前の頃は、防衛大学校を卒業して幹部候補生学校に入校することへの不安と期待に揺れ動いていたのを覚えています。57期以下の後輩たちもきっとそのような心持ちでいることではないでしょうか。

しかし今思えば、そんなに心配することもなかったのではと思います。そう思うことができるのは、きっと周りにいてくれる同期のおかげでしょう。

幹部候補生学校においては、何をしても、必ずすぐ傍には誰かしら同期がいてくれます。辛い時や苦しい時、そこには分かち合うことのできる同期がいます。自分に負けそうになった時には、同期という存在が自分を叱咤してくれます。幹部候補生学校は同期との強い関係を築くことのできる学校とも言えるかもしれません。

同期といえば、幹部候補生学校には防大出身のB課程の他、一般大のU課程、部内選抜のIやSLC、看護のN、医歯学のMD、薬学のP課程と様々な経験を持つ候補生が存在します。防大生という同期しか知らなかった私にとっては、とても新鮮なものです。

また、クラブ活動や合同意見交換会など、課程を超えて交流する行事も実施され、他の課程の同期とも話をする機会が増えました。異なる経験をしてきた同期の話は非常に興味深いものであり、ここで築いた関係は、将来共に勤務する上で必ず役に立つものです。

防衛大学校、または幹部候補生学校に在学している間には、同期という存在はとても身近なものではありますが、部隊に赴任されれば、1つの駐屯地に同期はおらず、自分1人だということも多々あります。卒業してしまえば、二度と会うことのない同期もいます。だからこそ、幹部候補生学校における同期と過ごすことのできるこの期間はとても貴重なものなのです。

入校してから今までを振り返れば、本当にあっという間のように感じられ、ついこの間入校したばかりのようにさえ思えます。このまま卒業して幹部になるかと思うと、自分の足りない資質・能力を思い知らされます。卒業まで私に残された期間はもう残り僅かではありますが、かけがえのない同期とともに良い幹部となれるよう、また防衛大学校に入校してから今まで育てていただいた方々のご恩に、少しでも報いることができるよう努力したいと考えています。

57期以下の皆さんは、今という一瞬一瞬を、自分のそばにいる同期を大事にして、胸を張って幹部候補生学校に着校してもらいたいと思います。

きっと何にも代えることのできない同期との絆を得られることでしょう。

防衛大学校を卒業して



一般幹部候補生 陸曹長
松尾 聡一郎

諸先輩方、同期生、後輩諸官の皆様におかれましては、日々の任務に世界各地で御活躍中のことと存じます。私は防衛大学校時に56期期生会長を勤めさせて頂きました松尾候補生と申します。学生時代は、防大同窓会から多大なるご支援を賜りましたこと、56期生を代表してこの

場を借りて厚く御礼申し上げます。卒業生として、防大同窓会の運営に微力ながら協力させて頂く所存であります。

防衛大学校時代、私はこの小原台だよりに自分の知っている先輩が掲載されているのを見て、嬉しく思い、また幹部候補生学校、部隊を意識したのをはっきりと覚えています。そんな経験から、ここでは主として防衛大学校の後輩へ向けたメッセージと自分の心境を語りたいと思います。

私の防衛大学校卒業時の心境は、早く卒業して部隊に行きたい気持ちと、貧血による体力面での不安、未知の世界への恐怖というのが入り乱れていました。幹部候補生学校に入校してから瞬く間に時間は過ぎ、10月になりました。今の心境は部隊への不安と期待が入り乱れている状態ですが、同時に、確かな自信も芽生えています。それはこの幹部候補生学校での生活が与えてくれました。貧血も改善されてきました。しかし同時に、この学校では自ら求めなければ何も得られないだろうと思っています。今やっていることは全て自分に返ってくる、そう自分に言い聞かせて今この瞬間を必死に頑張っています。

そんな私が防衛大学校時代にやっておけばよかったと思うことは英語、趣味、読書です。ひとつ目の英語は仕事で必ず使うということと、英語が勉強できる時間が限られてくるためです。私はそのせいで今大変苦勞しています。ふたつ目の趣味ですが、できれば一人でもできるのがいいと思います。私が今、休日に何をしているかといえば、同期や区隊でお酒を飲むかホテルにいるかです。これは日々の生活の反動ですが、客観的に見れば時間の浪費です。ここで趣味を持っていれば生活はもっと充実したものとなるはずですが。実は今、私もヴォイストレーニングに通おうかと考えています。最後に、読書、特に戦史系統の本を読むことです。戦史を学ぶことは経験のない我々が追体験できる有効な手段ですが、学ぶにはやはり時間をかける必要があります。そういう意味で少しでも本を読んでいれば、思考の幅がもっと広がったのだろうと考えています。

ここ幹部候補生学校は、福岡県久留米市の前川原駐屯地にあります。よく冗談で「鬼川原」や「二度と来るめえ」などと言われますが、そんなこの前川原は、陸上自衛隊幹部自衛官の「心のふるさと」です。そして私もそうやっていくのでしょうか。必ずここでの生活が糧となり、思い出す日が来ると思います。防衛大学校もそうでした。93BUとしてU課程、P課程と同期として生活していく中で、防衛大学校時代に培ったものが自然と活かされています。その時になって初めて「防衛大学校での生活は間違っただけじゃなかった。防衛大学校が自分をここまで成長させてくれたのだ」と実感しました。在校時は一般大学のキャンパスライフに憧れたりもしましたが、一般大学では今の自分には成れなかったと確信しています。私は今の自分が好きです。

ここまで、主として防衛大学校の後輩へ向けたメッセー

ジと自分の心境を述べてきましたが、間違いなく防衛大学校が私の原点であり、誇りであります。最近になって懐かしみながら当時の思い出を思い返したりしています。同じ防衛大学校の同期と会って話をすると決まって当時の思い出を語り合っています。それは陸海空を問いません。私が今になって思うのは、いつの間にか防衛大学校で過ごした日々がかけがえのない宝物となっていることです。それは一生変わることはなく、私の支えになるだろうと思います。

最後になりますが、防衛大学校教職員、諸先輩方、同期生、後輩諸官の皆様本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひ致します。皆様の更なるご発展を祈念して私のご挨拶とさせていただきます。

シーマンシップ



一般幹部候補生 海曹長
金子 紘士

全国各地でご活躍中の防衛大学校同窓会会員の皆様、海上自衛隊幹部候補生学校学生を代表し、かつ私自身も防衛大学校同窓会会員の一人として金子候補生がご挨拶申し上げます。ここでは、本校における教育や生活の一部を紹介し、現役の防衛大学校生へエールを送りたいと思います。

本校においては、よく「シーマンシップ」ということを言われます。これは海上自衛隊では、「シーマンシップ」をあらゆる教育訓練及び日常生活を通じて育成されるべき海上自衛官の必須の資質であるとしているためです。ではこの「シーマンシップ」とは何でしょうか。これは船乗りが具備すべき資質、心構えであり、知識や経験に裏付けられた合理的かつスマートな技術のことです。我々は海上自衛官になる者としてこの「シーマンシップ」を身に付けていかねばなりません。そのために、海上自衛隊幹部候補生学校においては立派な海の男となるための様々な艱教育が行われます。

我々が住む学生館での生活は、全て艦艇の生活を模倣しています。例えば、清掃のことを甲板掃除と言っています。自分たちの住む場所を艦艇における甲板に見立てているのです。国旗降下は陸、空自衛隊のように定時ではなく、日没時に降下します。海上自衛隊においては艦艇部隊が主体であり、艦艇以外の部隊でも艦艇の生活を

理解していなければ、十分な支援をできないと考えられているため、日課の流れも全て艦艇と同様にしているのです。国旗降下後は学生館内には灯火管制が敷かれ、すべてのカーテンが閉じられます。これも艦艇の生活を模倣している一つの例です。我々が教務を受ける通称「赤れんが」の教場の番号は右が奇数、左が偶数になっていて、これは艦艇の右舷側にある区画を奇数、左舷側にある区画を偶数で呼んでいることと一致します。このように実際に艦艇には乗っていないくても、艦艇の生活を意識して生活し、将来の艦艇勤務に向けて「シーマンシップ」を養っていくことが求められているのです。



次に、私が海上自衛隊幹部候補生学校に来て感じたことですが、この学校には日本の海軍が誇る伝統が溢れていると感じました。教育参考館には、今まで日本の海の護りを務めてきた我々の大先輩にあたる人々の展示が数多くあります。我々もこの長い歴史の中の一人になるのだと考えると、大きな力に支えられているような気がすると同時に、私たちが成し遂げなければならない国防という使命の重さを痛感させられます。学校の敷地内には、戦艦陸奥の砲台や、かつて活躍した艦艇の錨が各所においてあり、先ほど紹介した「赤れんが」も大変歴史のある建物で、大変価値があるものです。本校で行われている教育の方式も旧海軍からの伝統を受け継ぐものです。時間的余裕のない中で、分隊点検、短艇点検、武器点検といった数々の点検や短艇競技、総短艇、水泳競技、弥山登山競技、持久走競技など、多くの伝統的な競技を行うのです。これら一つ一つの行事に誠実に取り組んでいくことで、我々は将来、幹部自衛官として働くための基礎を習得して行くのです。最初は困難に思えることでも、決して諦めることはありません。なぜなら私達の前には同じ道を歩んだ多くの先輩方がおり、私達の後ろには、私達に続く後輩達がいるからです。長い歴史の連続性の中で、伝統を重んじてきた海軍の精神の故郷がここ幹部候補生学校なのだと思います。



我々63期一般幹部候補生一同は、将来の幹部自衛官になるための道を、幾度となく転びそうになりながらも着実に登っております。諸先輩方の築かれた良き伝統を継承し、シーマンシップを身に付けて、実際に部隊で活躍できる幹部を目指して頑張りますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いします。

最後に、防大にいる後輩達に向けて話します。我々56期生が幹部候補生学校に来て早くも3ヶ月が過ぎました。この間にも後輩達が57期生を中心として学生舎や校友会等の運営を、日々悩みながら頑張っているのだらうと思うととても頼もしい気がします。私が在校時に見た後輩達は皆、素晴らしい才能をそれぞれに持っていました。一人一人が努力を続けてその才能を伸ばしていけば、何も心配することはありません。幹部候補生学校に来て、しっかり絞られて、立派な幹部自衛官になることができるでしょう。防大にいて、今の生活に意義を見出せなくなっている者もいるかもしれませんが、一見意味のないように思えることに意味を持たせられるかどうかはあなた次第です。時間は無限ではありません。4年間は長いようでとても短いものです。日々目的意識を持って、成長を続けてください。みんなの頑張りを期待します。私達は諸先輩方に倣って一足先に行き、皆さんが歩きやすいように足跡を付けておきます。それではまた会う日まで。ありがとうございました。



指揮官に大切なこと

～ Theory of everything ～



一般幹部候補生 空曹長
舟津 貴正

航空自衛隊幹部候補生学校学生を代表し、舟津候補生が御挨拶を申し上げます。

「月日は百代の過客にして」と松尾芭蕉の言葉にもあるように、時の流れは留まることを知りません。ついこの間防衛大学校を卒業したかと思うと、もう目の前には幹部候補生学校の卒業が迫ってきています。入校してからの6ヶ月間を振り返ると、挑戦と失敗の連続であったように思います。そこには新しい発見や驚きがあり、また挫折や苦しみがありました。それらの経験を経て我々が得たものは数多く、日々は怒涛でありながらも彩りと輝きに満ちていました。

本稿では、そのような幹部候補生学校での課程履修を通して私が学んだこと、感じたことを、卒業前の心境と共に徒然なるままに書かせていただきたいと思います。生意気なことを書いていますが、若輩者の拙文ですのでご容赦下さい。

幹部候補生学校は、言うまでもなく幹部自衛官を育てる教育機関であります。幹部自衛官はいわば指揮官であり、課程においては各種訓練の小隊長や、競技会の責任者等、一人前の指揮官となるための演練の場が数多く用意されていました。その中で、私も小隊長や責任者をやる機会を与えていただき、貴重な経験や教訓事項を数多く得ることができました。そして、それらの中から「指揮官に大切なこと」を私なりに見出すことができました。

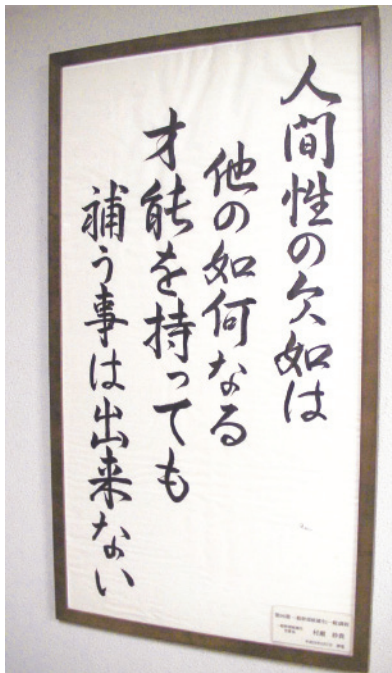
私が見出した「指揮官に大切なこと」、それは既に多くの人が述べている「人間性」です。なぜ人間性が指揮官に重要なのかと言いますと、それは人間性が指揮の構成要素である「統御」を形作るからだと考えます。統御とは、「部下自ら熱誠をもって任務遂行させる感化を与えること」であり、指揮官の人間性によって形成されるものです。人間性が豊かであればその指揮官の統御は豊かなものになり、貧しければ薄いものになります。つまり、統御は指揮官の人間性に基づくソフトパワーであり、管理等のハードパワーと共に指揮を支える大きな柱の一つであると言えます。統御無き指揮は、いわば「心」の無い指揮であり、そのような指揮を執る指揮官の後ろに部下が続かないことは自明の理であります。ここに、統御の重要性、さらにはそれを構成する人間性の大切さが見出せるのです。

さて、「人間性」と一口に言ってもその解釈の仕方は様々

であり、一つの概念に集約することは難しいと思われます。しかし、私が考える人間性をあえて言わせていただくと、それは「自分らしさ」であると思います。指揮官の人となりや性格等、その人らしさが人間性として指揮に発露するものであると考えるのです。この私の考えを読んで、「人間性や自分らしさというものは二十歳を超えると簡単に変わるものではなく、自分らしさが人として矮小なものであれば、その人の指揮の統御は一生貧しいものから変わることはないのか」、という疑問を抱く方がいるかもしれません。確かに、人間性や自分らしさは大人になった今、簡単に変わるものではありません。しかし、果たして個人が持つ人間性、その人らしさに貧しいものが存在するのでしょうか。性善説のようではありますが、人は皆、誰もが素晴らしい人間性や自分らしさを本来有しているものと私は思っています。統御が上手くできない人は、ただ自分らしさの良い部分を上手に表現できない、不器用な人であるというだけなのではないでしょうか。

この人間性が持つ価値や重要性は、幹部候補生学校学生隊舎の入り口に掲げられている次の言葉にも明らかでしょう。「人間性の欠如は他の如何なる才能を持っても補う事は出来ない」

それでは皆が等しく持っている人間性、自分らしさをどのようにすれば上手に発露させることができるのでしょうか。このことについての私の考えを、現役防大生に対して話したいと思います。人間性を上手に表現するためには、何よりもまず自分自身を知ることが大切であると考えます。自分の良い所や悪い所、得意



なことや苦手なこと、好きなことや嫌いなこと、全てをひっくりめた自分の姿を知るのです。そのための機会が防衛大学校には溢れています。学科でも、訓練でも、学生舎でも、校友会でも、競技会でも、何でもかまいません。100%の力をもって全力で取り組んでみて下さい。そこにカッコよさはありません。泥だらけになって、ただひたすらに、真摯に、自分自身と向き合ってみてください。そうすると自ずと自分自身の姿が見えてくるはずです。もし、そこで自分の姿が見えなくてもきっと大丈夫。頑張る君には、周りの仲間が教えてくれるはずです。

「君はこういう所がスゴイ」、「君のこういうところは直した方がいい」と。もしそういう人と巡り会えたなら、その人のことを心から大切に、信頼して下さい。なぜなら、自分を認め、率直な言葉をくれるその人こそが、「真の仲間」であるからです。

この文章を読んで、「何だ、指揮官に大切なことってただの人間性か」と思う現役生もいるかもしれません。でもきっと、本当に大切なことはいつだって私たちが思っているよりもずっとシンプルで、簡単なものであると私は思っています。そしてシンプルゆえに生きていくことの全ての本質につながっていると、たかだか24年間の人生経験ですが、そう思っています。

“Theory of everything is very simple!!”

現役防大生のみんなが防大生活を通して自分を見つめ、かけがえのない仲間を得られることを願っています。ガンバレ！

我々56期航空要員は間もなくそれぞれの特技を拝命し、全国の部隊に散っていきます。私自身、そこに不安が全く無いという嘘になりますが、それ程怖くはありません。なぜなら、私は防大と幹部候補生学校での日々を通して自分自身を知り、大切な仲間を得て、全てに通ずる「指揮官に大切なこと」を私なりに理解できたからです。だから、持っていく「思い」は多くなくいいと思っています。私はこの両手に掴んだ大切なものをしっかりと握りしめ、この先に続く自衛官人生という長い坂道を止まることなく歩き続け、「百万の高み」を目指していく所存です。

最後に、防衛大学校に関わる全ての人に幸多からんことをお祈り申し上げ、拙文の結びとさせていただきます。



平成23年度防衛大学校同窓会決算書

平成24年3月31日現在
〔単位：円〕

区分	事業等	23年度予算額	23年度決算額	備考		
一般事業	収入					
	会費	20,000,000	22,061,455			
	預貯金利息	2,600,000	4,517,760			
	雑収入	50,000	69,000			
	収入合計（一般事業）		22,650,000	26,648,215		
	支出	母校の充実・発展に寄与	1 新入生に対する講話	0	2,570	
			2 各種競技会支援	480,000	674,204	
			3 期生会発会等支援	200,000	298,745	
			4 学生の部隊実習支援	1,010,000	1,013,685	
			5 顕彰碑顕花式支援	250,000	261,250	
			6 開校祭支援	1,600,000	1,699,624	
			7 校友会対外活動支援	800,000	0	24年度支出予定(繰越)
		小計		4,340,000	3,950,078	
		会員相互の親睦交流	9 機関誌の発行	4,130,000	3,117,652	
			11 会員の慶弔業務	1,000,000	279,795	
			12 各種競技大会による交流	180,000	205,503	
			13 地域支部等への助成	500,000	202,500	
			14 卒業留学生との交流	210,000	210,000	
			15 HVD支援	320,000	305,300	
			16 HCD支援	320,000	361,868	
		17 講演会・懇親会の実施	40,000	40,000		
		小計		6,700,000	4,722,618	
		社会活動への寄与	19 安全保障講座支援	100,000	100,000	
			小計	100,000	100,000	
	会務運営基盤の充実	20 代議員会の実施	1,600,000	1,841,687		
		21 同窓会名簿の維持	30,000	0		
		22 期生会名簿の作成支援	120,000	40,420		
		23 期生会等との連絡網の整備	0	0		
24 期生会等のHP開設助成		60,000	60,210			
25 地域支部等の設立支援		200,000	0			
26 会費納入の促進		370,000	350,922			
小計		2,380,000	2,293,239			
検討	27 法人化の検討	0	0			
	28 機関誌の発行のあり方検討	0	0			
	小計	0	0			
維持管理	事務費	800,000	879,008			
	通信費	400,000	549,269			
	交通費	700,000	531,438			
	会議費	120,000	47,424			
	事務員費	2,000,000	2,000,000			
	事務局室賃貸費	2,800,000	2,766,801			
	小原台事務局運営費	100,000	67,093			
	小計	6,920,000	6,841,033			
予備費	2,210,000	55,125	学術振興			
支出合計（一般事業）		22,650,000	17,962,093			
創立50周年記念事業	収入					
	積立金の取り崩し①	2,500,000	2,500,000			
	その他	0	1,000,000	講演会中止に伴う講演料の戻入		
	収入合計（50周年記念事業）		2,500,000	3,500,000		
	支出	自体事業	記念講演	0	0	(22年度中止)
			記念祝賀会	0	5,350	中止に要した支出
			同窓会旗の制定	0	0	(22年度実施済)
			「小原台だより」特集号発刊	1,000,000	0	
			歴代校長の式辞集作成	50,000	37,680	
			同窓会業務史の整備	0	0	(22年度実施済)
			東日本大震災被災者支援	0	2,068,742	計画外（実施中）
		予備費	450,000	0		
		小計		1,500,000	2,111,772	
		地域支部支援事業	地域支部支援事業	1,000,000	0	
小計	1,000,000		0			
母校支援事業	記念品の寄贈	0	0	(24年度実施予定)		
	「防衛の務め」復刻支援	0	0	(21年度実施済)		
	小計	0	0			
支出合計（50周年記念事業）		2,500,000	2,111,772			
一般会計収入総計②		25,150,000	30,148,215			
一般会計支出総計③		25,150,000	20,073,865			
積立金への繰り入れ（＝②－③－①）		-2,500,000	7,574,350			

会費納入状況

平成24年10月31日 現在

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数				期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	320	94.4	11	6	2	19	30	410	346	84.4	47	11	6	64
2	359	347	96.7	8	2	2	12	31	431	409	94.9	15	6	1	22
3	484	452	93.4	17	12	3	32	32	404	354	87.6	31	13	6	50
4	465	437	94.0	20	7	1	28	33	447	376	84.1	44	19	8	71
5	529	483	91.3	26	11	9	46	34	426	373	87.6	38	9	6	53
6	477	433	90.8	36	5	3	44	35	496	479	96.6	9	5	3	17
7	503	460	91.5	29	7	7	43	36	354	345	97.5	6	2	1	9
8	467	421	90.1	33	8	5	46	37	384	347	90.4	16	7	14	37
9	498	447	89.8	35	6	10	51	38	337	264	78.3	59	10	4	73
10	498	456	91.6	25	8	9	42	39	356	328	92.1	8	11	9	28
11	495	448	90.5	28	8	11	47	40	388	329	84.8	33	21	5	59
12	466	417	89.5	29	8	12	49	41	405	365	90.1	23	14	3	40
13	468	421	90.0	30	8	9	47	42	407	366	89.9	19	12	10	41
14	491	459	93.5	18	2	12	32	43	431	385	89.3	23	15	8	46
15	463	449	97.0	9	3	2	14	44	381	221	58.0	117	39	4	160
16	428	405	94.6	9	4	10	23	45	351	159	45.3	131	20	41	192
17	498	454	91.2	20	10	14	44	46	360	236	65.6	68	7	49	124
18	423	397	93.9	9	7	10	26	47	388	338	87.1	32	11	7	50
19	446	413	92.6	14	17	2	33	48	425	378	88.9	23	12	12	47
20	383	352	91.9	17	3	11	31	49	325	294	90.5	26	4	1	31
21	489	468	95.7	12	3	6	21	50	369	320	86.7	27	13	9	49
22	474	416	87.8	28	9	21	58	51	411	371	90.3	16	13	11	40
23	408	386	94.6	8	8	6	22	52	415	346	83.4	15	23	31	69
24	446	414	92.8	8	17	7	32	53	431	384	89.0	21	21	5	47
25	422	400	94.8	10	4	8	22	54	364	331	90.9	14	8	11	33
26	506	467	92.3	26	7	6	39	55	397	370	93.2	12	10	5	27
27	388	377	97.2	8	1	2	11	56	372	354	95.2	17	0	1	18
28	451	421	93.3	17	8	5	30								
29	391	358	91.0	16	7	10	33								

会員数の項：会費納入対象者(留学生を除く防大卒業生数)

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 直海 康寛

昨年同様、本年も56期生の陸・海・空幹部候補生学校在校者のほぼ全員に完納していただきました。衷心より御礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のため、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果を上げております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦並びに母校の発展及び社会的活動への寄与」という目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から幹部候補生学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨をご理解いただき、会費未納の方(事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。)におかれましては、会費を納入して頂きたく宜しくお願い申し上げます。

【納入先】 ゆうちょ銀行

口座番号 00260 - 5 - □□24826 (百万及び十万の桁は無記入)
 加入者名 防衛大学校同窓会
 通信欄 期別、要員別及び部隊名(現役の場合)を記入

【納入先】 三井住友銀行 飯田橋支店

口座番号 1270680
 加入者名 防衛大学校同窓会 代表 藤枝 茂樹
 なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、部隊名(現役の場合)振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

【連絡先】

同窓会本部事務局：〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
 Tel/Fax：03-3351-8910
 eメール：honbu@bodaidsk.com

【参考】

普通会費

- ・防大本科卒業生
 卒業時の3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)
 - ・防大研究科卒業生(一般大学卒業生)(19年度改正)
 卒業年度の3尉俸給月額(1号俸)の1/8(千円未満切捨)
- 延滞金 1,000円×(完納年度-3尉任官年度又は研究科卒業年度)
 (防衛大学校同窓会会費に関する細則より)

会費算出例：45期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度 24年度、3尉任官年度 13年度(14.3)
 24年度納入額 60,000円+1,000円×(24-13)=71,000円
 (詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい)

機関誌「小原台だより」投稿のお願い

平成24年度機関誌「小原台だより」は、ご投稿頂きました方々のお蔭で編集することが出来、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ご承知のように、「小原台だより」は、同窓会会員の皆様方からの投稿記事によって成り立っており、また、現役自衛官や退職自衛官等の様々な分野でご活躍の様子が、同窓会会員各位の啓発に役立っております。

「小原台だより」を益々充実発展させるためには、皆様方からの積極的な記事の投稿が望まれますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

平成25年度機関誌「小原台だより」の投稿要領は、次のとおりです。

投稿通知期間：**平成25年1月～6月**

メール (jmk@bodaidsk.com)、又は、電話 (**03-3351-8910**) で

投稿締め切り：**平成25年10月15日(火)**

投稿文書：A4縦使用・横書きで、文字サイズ12Pとし、2,000文字（挿入写真の分を含む）を基準とし、投稿者の顔写真を添付

投稿方法：メール (jmk@bodaidsk.com) 又は、CD等で。写真の郵送は可

機関誌担当：同窓会本部事務局広報部 森本 澄男 (22期・陸上)

機関誌「小原台だより」の配布部数縮減に対する協力について

現在同窓会会員の皆様に配布しております機関誌「小原台だより」は、誌面の活性化等に関し皆様方の多大なご支援・ご協力のお蔭をもちまして、今年度で既に第20号の発刊を迎えることができました。

既にご案内のとおり、皆様に冊子として配布しております「小原台だより」は、同時に防衛大学校同窓会ホームページ（以下「同窓会HP」という）(<http://www.bodaidsk.com/>)にPDFファイルとして閲覧できるようになっております。

現在、同窓会本部におきましては、経費の節約等により母校支援の強化を進めるため、「小原台だより」の同窓会HPでの閲覧を広く会員に推奨し、配布部数の縮減を推進しております。同窓会HPの閲覧により、「小原台だより」の配布部数縮減にご協力いただける方は、メール (jmk@bodaidsk.com) 又は、電話 (**03-3351-8910**) で同窓会本部までご連絡いただけますようお願い申し上げます。

同窓会名簿管理に関するお知らせ

I 名簿の維持管理

会員名簿は各種同窓会活動の基盤となるものであり、同窓会事務局としましては出来るだけ最新のデータの確保と厳正な維持管理に努めております。データの確保については、主として以下の要領で実施しておりますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

1 各期生会からの通知

個人情報保護法制定等を受け関係各所からのデータ収集が難しくなったことから、名簿の修正は、平成16年度から各期生会代議員に、平成19年度からは各期生会業務幹事に対して、例年8月の定期異動後をお願いしております。

平成21年度からは電子メールの活用を図り、期生会との連携の強化を図りつつデータの収集に努めさせて頂いております。

業務多忙にも拘らず担当して頂いた皆様、ご協力有難うございました。

2 会員個人からの通知

同窓会ホームページ上の「異動連絡」の項は、削除致しました。今後は同窓会事務局へ電子メール（jinji@bodaidsk.com）または電話等での連絡をお願いします。

II 利用目的及びプライバシーポリシー

1 利用目的

次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供します。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の発送
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会、校友会、教務班等各種活動への協力
- (5) 地域支部等への協力

2 プライバシーポリシー

以下のプライバシーポリシーに従い個人情報の適切な保護に努めております。

- (1) 利用目的の範囲内で収集、管理します。
- (2) 会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はしません。
- (3) 会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、速やかに対応します。（同窓会事務局人事部担当にご連絡下さい。）
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩の無いように適切に管理します。

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成24年10月11日現在

平成24年度同窓会本部役員

会 長	齋藤 隆	14	海	50周年顧問	東郷 行紀	18	海	経理部長	畑田 実	20	海
副会長兼理事長	林 直人	15	陸	50周年統括部長	岩城 征昭	20	陸	経理部長補佐	藤枝 茂樹	21	陸
副 会 長	荒川 堯一	16	海	50周年	風間 敏榮	19	陸	経 理 部	道 憲之	22	空
副 会 長	永岩 俊道	15	空	50周年	飯田 克幸	21	空	事業部長	山形 克己	20	陸
副 会 長	岩崎 茂	19	空	総務部長	佐藤 秀樹	20	陸	事業部 ゴルフ・講演	市川 当	21	陸
理事兼事務局長	直海 康寛	16	陸	総務部長補佐	鎌田 正広	21	陸	事業部 ゴルフ・講演	山田 聡	22	陸
理 事	加藤 保	17	海	総 務 部	湯元 正義	21	海	事業部 HCD/HVD	日笠玲治郎	21	陸
理 事	菊川 忠継	18	空	総 務 部	山下 俊司	22	空	事業部 HCD/HVD	島田 正登	22	海
理 事	酒井 健	19	陸	人事部長	今井 恵治	20	陸	事業部 囲碁・留学生	内藤 正	20	空
理 事	野口 泰明	16	海	人事部長補佐	宮崎 行隆	20	海	事業部 囲碁・留学生	溝口 秀盛	21	陸
理 事	太田 牧哉	26	陸	人事部長補佐	冬木 義雄	21	空	事業部 囲碁・留学生	北村 義明	22	陸
理 事	江口 直也	26	陸	人 事 部	吉永 春雄	22	陸	事業部 テニス・助成	金子 吉宏	21	海
理 事	槻木 新二	24	海	人 事 部	岩田 高明	22	海	事業部 テニス・助成	泉 賢一	22	空
理 事	森本 哲生	25	空	広報部長	戸田 友敬	20	空	小原台事務局長	武藤 茂樹	28	空
会計監事	瓦谷 育夫	15	陸	広報部長補佐	畔柳 敏郎	21	空	小原台事務局長補佐	野村 佳正	29	陸
会計幹事	岩城 誠	15	海	広報部長補佐	堀 弘	21	陸	小原台事務局長補佐	坂口 大作	28	陸
会計幹事	持田 清久	17	海	広 報 部	森本 澄男	22	陸	小原台事務局長補佐	與儀 孝	34	空
会計監事	松永 茂	17	空	広 報 部	末次富美雄	22	海	小原台事務局長補佐	中澤 信一	28	海
				広報部技術指導	村田 和美	17	陸	小原台事務局長補佐	枇杷 利政	27	陸
								小原台事務局長補佐	福富 俊幸	29	空

平成24年11月15日現在

地域支部等役員

北海道地域支部	支部長	穴口 一男	9	陸	山口地区支部	支部長	高橋 佳嗣	11	陸	熊本地区支部	支部長	斉藤 四郎	9	陸
	事務局長	前田貞一郎	30	陸		事務局長	神田 和穂	14	陸		事務局長	森 三千雄	10	陸
東北地域支部	支部長	吉川 洋利	14	陸	四国地域支部	支部長	青木 初年	9	空	大分地区支部	支部長	柳瀬 特志	7	陸
	業務幹事	原田 富雄	17	陸		事務局長	松浦 孝昇	7	陸		事務局長	工藤 和信	16	陸
栃木地区支部	支部長	大内 伸浩	10	陸	徳島地区支部	支部長	青木 初年	9	空	宮崎地区支部	支部長	小森 四雄	12	陸
	理事兼事務局長	正岡富士夫	15	空		事務局長	清水 祥人	12	陸		事務局長	二宮 成一	14	陸
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸	香川地区支部	支部長	戸松 久忠	6	陸	鹿児島地区支部	支部長	増田 克己	12	陸
	事務局長	小島 健二	14	空		事務局長	岡林 靖之	8	海		事務局長	兒玉健二郎	22	陸
北陸地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸	高知地区支部	支部長	川田 公一	16	空	沖縄地域支部	支部長	山縣 正明	14	陸
	事務局長	西川 清	15	陸		事務局長	赤岡 順	4	陸		事務局長	金井 裕也	46	空
東海地区支部	支部長	佐藤裕紀夫	12	空	愛媛地区支部	支部長	瀬川紘一郎	10	海	小原台クラブ	支部長	岩崎 俊雄	9	陸
	事務局長	木原 文雄	12	陸		事務局長	竹下 治雄	9	陸		事務局長	山田 耕平	40	空
関西地域支部	支部長	田川 陸夫	12	陸	九州地域支部	支部長	松尾 隆二	15	陸	桜華会	会長(支部長)	塚口 千枝	40	陸
	事務局長	新見 泰朗	17	陸		事務局長	竹下 治雄	9	陸		事務局長	吉田ゆかり	40	空
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空	福岡地区支部	支部長	森永 康則	13	海					
	業務幹事	永岑 富彦	10	陸	佐賀地区支部	支部長	福岡龍一郎	26	陸					
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海	長崎地区支部	支部長	新野 克洋	9	海					
	事務局長	森田 寧	17	海		業務幹事	樋口八洲太郎	10	海					

会員の訃報

平成23年12月11日から平成24年11月30日までに届いた会員の訃報を紹介します。
なお、詳細は防衛大学校同窓会ホームページでご覧下さい。

1期生

(陸) 竹内 俊 平成24年 3月2日
杉浦満寿男 平成24年 4月25日
(海) 米山 治通 平成24年 10月27日
(空) 伊藤 茂 平成24年 7月6日

2期生

(陸) 高見 信義 平成24年 4月6日
北村 繁光 平成24年 5月1日
佐藤 平八 平成24年 9月11日
西川 宗晴 平成24年 10月25日
(空) 森山 博和 平成24年 3月22日

3期生

(陸) 田中 祥一 平成23年 8月5日
大塚 喜弘 平成23年 8月26日
中村 博 平成23年 9月18日
寺山 賢 平成23年 9月28日
長野政太郎 平成23年 10月29日
牧田 直義 平成24年 2月23日
松本 勇虎 平成24年 4月10日
(海) 小川 矩弘 平成24年 2月14日
(空) 井川 豊水 平成24年 8月22日
岡本 東明 平成24年 9月8日

4期生

(陸) 川井田之重 平成24年 2月26日
山内 英男 平成24年 3月12日
菊池 勝夫 平成24年 10月19日
(海) 長嶺 公成 平成23年 8月9日
(空) 平松 雅史 平成23年 10月12日
筒井 俊樹 平成24年 4月9日
藤本 隆 平成24年 4月10日

5期生

(陸) 池田 惟仁 平成23年 不明
脇岡 和彦 平成24年 2月2日
三嶋 正道 平成24年 6月2日
広田 徹 平成24年 5月6日
岡田 章 平成24年 9月23日
中村 一夫 平成24年 10月26日
(海) 古石 次夫 平成24年 3月29日
石田 清東 平成24年 4月22日
末永 晴志 平成24年 10月3日
(空) 花田 光弘 平成24年 10月11日

6期生

(陸) 星田 雅也 平成24年 1月9日
中尾 征紀 平成24年 10月31日
(海) 柴田 亮一 平成24年 6月9日

7期生

(陸) 前野 善則 平成23年 7月10日
石丸 春英 平成23年 12月9日
富本賢三郎 平成24年 4月25日
(海) 岡田 仁宏 平成24年 1月15日
(空) 渡邊 保夫 平成24年 4月10日

8期生

(陸) 遠藤 亘 平成24年 11月4日
(海) 杉山 靖樹 平成23年 12月11日

9期生

(陸) 佐藤 和夫 平成24年 2月17日
杉尾 武彦 平成24年 9月1日
(海) 多和田映一 平成23年 8月1日
(空) 松延 庵 平成24年 1月20日
鈴木 一嘉 平成24年 3月12日

10期生

(空) 相原 洋 平成23年 6月9日
新地 洋丸 平成24年 10月13日

11期生

(陸) 佐々木建士 平成24年 1月21日
橋 隆三郎 平成24年 3月10日
坂本 光平 平成24年 5月25日
佐野 一 平成24年 9月11日
島津 昌夫 平成24年 10月13日
(空) 三苦荘二郎 平成24年 4月5日
松崎 功 平成24年 6月3日

12期生

(陸) 三宅 忠男 平成24年 6月8日
溝淵 征夫 平成24年 8月21日
(空) 河合 健治 平成23年 11月10日

13期生

(海) 中上 修司 平成24年 2月6日
(空) 中島 輝之 平成24年 2月19日
酒井 浩一 平成24年 11月8日

14期生

(陸) 重藤 馨 平成24年 9月9日
(海) 岩谷 文隆 平成24年 3月28日
(空) 石井 隆 平成23年 3月4日

15期生

(陸) 大中 好信 平成24年 3月21日
(空) 原田 敬三 平成24年 1月

16期生

(陸) 江川 武志 平成24年 3月26日
角 裕行 平成24年 10月13日
(空) 中井 武康 平成11年 12月11日

18期生

(海) 大森 晃 平成22年 6月10日
鈴木 英隆 平成24年 3月19日

19期生

(陸) 内野 龍之 平成24年 9月23日
(海) 下山 公貴 平成21年 4月1日
大森 晃 平成22年 6月10日

20期生

(陸) 西山 均 平成24年 7月3日

21期生

(陸) 小松 和典 平成24年 4月18日

23期生

(陸) 橋本 純一 平成23年 12月9日
(空) 小宮 剛 平成23年 7月26日

25期生

(空) 荒井 望 平成23年 8月15日

28期生

(陸) 實藤 孝一 平成24年 5月10日

44期生

(陸) 阿部 慎也 平成23年 10月19日
(空) 吉川 敏文 平成24年 5月14日

55期生

(空) 佐々木 平成24年 不明

56期生

(陸) 石井 達郎 平成24年 5月18日



編集：堀 弘 (21期・陸上)、森本 澄男 (22期・陸上)
印刷：(株)エイコープリント



第56期生 卒業式

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
TEL・FAX 03-3351-8910
E/M: honbu@bodaidsk.com